



TITLE:

植民地期インドネシアにおけるラジオ放送の開始と音楽文化：『NIROM の声』が描く音楽文化

AUTHOR(S):

田子内, 進

CITATION:

田子内, 進. 植民地期インドネシアにおけるラジオ放送の開始と音楽文化：『NIROM の声』が描く音楽文化. 東南アジア研究 2006, 44(2): 145-203

ISSUE DATE:

2006-09-30

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/53848>

RIGHT:

植民地期インドネシアにおけるラジオ放送の開始と音楽文化

——『NIROM の声』が描く音楽文化——

田 子 内 進*

Soeara NIROM and Musical Culture in Colonial Indonesia

TAKONAI Susumu*

The magazine *Soeara NIROM* (Voice of Nederlands Indische Radio Omroep Maatschappij), was issued periodically from 1934 to 1942 to introduce its radio program specifically to Indonesian-reading Nederlandsch-Indie listeners. NIROM itself was established in 1934 as an official network, first broadcasting in Dutch and subsequently in Indonesian. This paper attempts to depict the musical culture of the time by quantifying the frequency of music programs for each broadcasting station in October 1936 and January 1942. This analysis of musical programming depicts a very diverse musical culture in Nederlandsch-Indie and indicates that radio broadcasting, as a new medium, promoted interaction among the musical genres.

In October 1936, music constituted more than 70 percent of radio programming in number of programs and approximately 83 percent in programming hours. Of the various musical genres broadcast by NIROM, six were dominant: *kroncong*, Javanese music, Sundanese music, Malay music, Chinese music, and Arabic music. *Kroncong* was the most popular. It seems that *kroncong* actively incorporated a musical element of *rumba* popularized all around the world by the 1930 hit song *El Manicero*. Consequently, a new style of *kroncong rumba* was created. A good example is *Rumba Tamang Mango*, sung by the Eurasian singer Annie Landouw. The most famous *kroncong* singers were S. Abudullah and Miss Iem, well known in Singapore and British Malaya as well. There was little local music except Gambang Kromong, an ensemble based in and around Batavia (Jakarta) that combined Indonesian and Chinese instruments and styles. Malay music was represented by *bangsawan*, a modern style combining Indian, Arabic, Chinese, and Western elements into traditional Malay music. Female singers like Miss Maimoon and Miss Tjiah were popular. These singers belonged to *bangsawan* groups in Singapore and British Malaya, as well as Nederlandsch-Indie. The popularity of Arabic music arose mainly from Arabic films starring actors like Om Kalsum and featuring the *gambus*, a lute instrument brought by Hadhramaut immigrants residing in Surabaya. A *gambus* group led by Syech Albar enjoyed high popularity.

In 1942, the popularity of these six musical genres continued, although music programming itself had

* 東京大学大学院総合文化研究科; Graduate School of Arts and Sciences, The University of Tokyo, 3-8-1 Komaba, Meguro-ku, Tokyo 153-8902, Japan
e-mail: kece@ja2.so-net.ne.jp

been reduced to approximately 44 percent of programs and 69 percent of programming hours. This was due to an increase in other programming, including news coverage of the eruption of war in Europe. *Kroncong* declined in frequency and program hours, with few new styles or singers emerging. Several genres of local music, such as Minangkabau, Ambon, Batak, and Acehnese, which had hardly been broadcast in 1936, were on the air. Chinese, Arab, and Malay songs were relatively more popular than they had been. Malay music became more diverse, with domestic groups such as Penghiboer Hati, Sinar Medan, and Patjaran Muda seeming to perform different styles than *bangsawan*. In the *gambus* genre, while Syech Albar's popularity was still high, many new *gambus* groups were established at Batavia, Semarang, Medan, and Garut (in West Java) outside Surabaya.

In addition, the new genre of *harmonium* music had emerged by 1940 and was frequently aired. The *harmonium*, a small reed organ set in a box, was an essential instrument of modern Malay music. Judging from the sound source, it seems that *harmonium* music was basically *gambus*, or Arabic music, but because it emphasized the sound of the *harmonium*, it was regarded as Malay music. In fact, the style of *gambus* and Malay groups in the 1940s indicates that interaction among them took place flexibly and easily. Some *gambus* groups, as well as Malay music groups, called themselves *harmonium* groups. By the early 1950s, these *harmonium* groups were calling themselves *orkes melayu* (Malay orchestra). Therefore, it is likely that *harmonium* groups were the predecessor of *orkes melayu*, which in turn led to *dangdut* in the 1970s.

Keywords: radio, NIROM, PPRK, *kroncong*, *gambus* music, Malay music, *harmonium* music, *dangdut*

キーワード：ラジオ、NIROM（オランダ東インドラジオ放送会社）、PPRK（東洋ラジオ組合連盟）、クロンチョン音楽、ガンブス音楽、ムラユ音楽、ハルモニウム音楽、ダンドゥット

I はじめに

1945年9月11日、旧日本軍政下でラジオ放送を独占していた日本放送協会のインドネシア人職員らがジャカルタに集まり、インドネシア国営ラジオ局（RRI: Radio Republik Indonesia）の設立を宣言した。RRIはその後の対オランダ独立戦争において国民に対する情報伝達と闘争心の鼓舞という重要な役割を果たした。そのような経緯もあり、この日は「ラジオの日（Hari Radio）」としてインドネシア・ラジオ史の中で特別な意味をもつ日とされている。

しかし、インドネシアにおけるラジオの歴史は1945年9月11日に突然始まったわけではなく、蘭領東インド時代まで遡ることができる。1942年3月、東インド政庁の公共ラジオ局が日本軍宣伝部によって閉鎖・接収され、ほぼ9年間にわたる放送活動に終止符を打った。これがNIROM（Nederlands Indische Radio Omroep Maatschappij；オランダ東インドラジオ放送会社）と呼ばれるラジオ局である。NIROMは、西洋人向けのオランダ語放送（第一放送、

あるいは西洋放送：Omroep bagian ke-Baratan」と、インドネシア人向けのインドネシア語放送（第二放送，あるいは東洋放送：Omroep bagian ke-Timoeran）を行い，リスナー向けサービスの一環として番組雑誌を定期的に発行した。その一つが，東洋放送のリスナー向けにスラバヤで発行されたインドネシア語雑誌『NIROM の声（*Soeara NIROM*）』である。¹⁾ それでは，『NIROM の声』はどのような内容の雑誌であったのだろうか。

1936年第20号を例に『NIROM の声』を繙いてみると，表紙（図1）は，フィリップ製のラジオ受信機951Aの宣伝とワヤン・オラン（Wayang Orang）の挿し絵で飾られている。次いで，目次（Penoendjoek Katja/Inhoud）があり，以下，3～11ページにかけて，「東洋



図1 *Soeara NIROM* 表紙
出所：『*Soeara NIROM* 3 (20) 1936a』

放送経営陣より（Pengoeroes Omroep ke-Timoeran）」「NIROMからのお知らせ（Berita NIROM）」「英語講座（Radio Cursus bahasa Inggris）」「列島番組（Archipel programma）」「スラバヤ NIROM 第二放送マイクロフォン談話（Causerie Microfoon Nirom II-Soerabaia）」「既習の歌（Tembang-tembang jang telah dipeladjarkan）」「体操（Gymnastiek）」「キリスト教講話（Penerangan boeat Causerie Agama Nasranie）」「ラジオの世界（Doenia Radio）」「子供の学舎（Taman Poetra；ただし内容はクロスワード）」が続く。そして，12ページから最後の43ページまでが各放送局別の番組表になっている。1942年版は，1936年版と較べ一般広告の量が増加し中国の昔話等も掲載されている。このように，『NIROM の声』は番組案内を中心に編集された娯楽雑誌であり，楽団や歌手の写真が豊富に掲載されていることから，当時の音楽文化の状況を視覚的に確認する意味でも有用な史料と言えよう。

本稿では，植民地期インドネシアのラジオ放送の開始と発展を詳しく整理した上で，『NIROM の声』の番組表のなかで特に音楽番組に着目²⁾し，放送された音楽の頻度をジャンル別及び放

1) 筆者がインドネシア国立図書館（Perpustakaan Nasional）で入手した『NIROM の声』は，1936年第20号（10月16～31日）及び第22号（11月16～30日），1942年第1～4号（1月4～31日）及び第9～10号（3月1～14日）の計8誌である。1936年版は隔週（15日ごと）発行で，1942年版は週刊である。月間購読料は0.25ギルダーであった。なお，オランダ語版の雑誌は『Radio-Omroep（ラジオ放送）』。

送局別に数量化することによって音楽番組の傾向を考察・分析し、当時の音楽文化の状況をできるだけ具体的に描き出すことを目的とする。地域毎の音楽傾向が明らかになることから、当該地域の社会特性を音楽文化を通じて再確認することも可能となる。もちろん、当時のラジオ放送は東インド政庁のコントロール下にあったため、放送された番組には東インド政庁の何らかの意向が反映されていたと考えて間違いないであろう。音楽も例外ではなく、ラジオ放送の音楽番組は必ずしも当時の音楽文化を正確に反映していないとの指摘も可能であろう。しかし、後述するようにNIROM 東洋放送の開始を巡る経緯から判断すると、東インド政庁が東洋放送の音楽番組編成に何らかの影響力を行使したとは考えにくい。したがって、『NIROM の声』は当時の音楽文化を客観的に把握するに十分利用可能なテキストと考える。

筆者がこの時代の音楽文化状況に着目する理由は次の4点である。

第1点は、インドネシア音楽文化の歴史におけるこの時代の重要性である。1920年代前半にかなりの盛り上がりを見せたインドネシア民族主義運動は、1930年代以降、東インド政庁の厳しい対応により活動の停止を余儀なくされ、政庁との協調主義的態度をとる民族主義者だけが活動を許されていた。一方、民族主義運動にとって暗黒の時代とも言われるこの時代は音楽文化面では新しい時代の幕開けを告げる時代でもあった。19世紀末に欧米で発明されたラジオとレコードという新しい大衆メディアが音楽の生産や流通に画期的な変化をもたらし、音楽の商業主義化が始まった。後述するように、この潮流は植民地下のインドネシアにも波及し、音楽の制作、消費、流行などの音楽文化のあり方が大きく変化した。奇しくもこの時代はインドネシアという国民国家が生れる直前の時代でもある。音楽の大衆化という分脈、あるいは民族主義運動を通じた文化統合という分脈からも、この時代の音楽文化はその後のインドネシア音楽文化の方向性を示す重要な時代と言えよう。

第2点は、現代インドネシアの代表的なポピュラー音楽ダンドゥット (dangdut) の歴史記述との関係である。現代インドネシアには大きく分けて4つの音楽が存在する。インドネシア語で歌われる全国区のポピュラー音楽、主に地方語で歌われる地方ポップス (ポップ・ダエラ (pop daerah)), ガムラン音楽等の伝統音楽、ナシード (nasyid) やカシダ (qasidah) 等の宗教音楽である。ダンドゥットはインドネシア語で歌われる全国区の音楽で、ムラユ (マレー) 音楽 (musik melayu) をベースに様々な音楽要素が融合し発展してきた。ここでいうムラユ音楽には若干説明が必要であろう。ムラユ (マレー) は、論じるテーマによってエスニシティやイデオロギー、包摂的な文化総体など様々な意味をもつため、単一の尺度で定義づけすることは難しい。³⁾ 本稿で用いるムラユは、地理的空間をマレー半島及びスマトラ東海岸部、西カリマンタンに限定した上で、その空間で暮らすイスラーム教徒でマレー語を話す人々のエスニ

2) 山本浩子 [1997:23-24] はガンバン・クロモン研究の中で『NIROM の声』の音楽番組に着目し、当時のガンバン・クロモンの楽団や演奏者の傾向について分析している。

シティを指す意味で用いる。したがってムラユ音楽とは、特に断りのない限り、これらの空間でムラユ人によって演奏される音楽の総体を指し、その中でも、いわゆる伝統音楽ではなくハルモニウム（後述）やバイオリンなどの西洋楽器の導入が行われた19世紀末以降の音楽を指すことにする。ダンドウットの歴史記述にはインドネシアにおけるムラユ音楽の浸透と発展を辿る作業が重要であり、筆者は拙論⁴⁾の中で、ムラユ音楽がジャワ島に浸透し始める19世紀末から1920年代頃の時代と、ムラユ音楽が急速に浸透する1950年代から1965年までの時代をそれぞれ取り上げ、ムラユ音楽の発展過程について明らかにした。しかし、ラジオやレコードという新しい大衆メディアが登場する1920年代から日本軍政が始まる1940年代前半までのムラユ音楽の状況については不明な点が数多く残されたままであった。このような疑問点を解明するために『NIROMの声』は多くの有用な情報を提供している。この史料を使用して、メディア時代黎明期におけるムラユ音楽の発展を描き出すことが本稿の主要な目的のひとつである。

第3点は、クロンチョン音楽（kroncong）⁵⁾ に対する評価の再検証である。この時期のインドネシア音楽文化を扱った研究はクロンチョン音楽を通じて語られることがほとんどである。⁶⁾ クロンチョン音楽とインドネシア民族主義の関係を論じた土屋健治は、1925年のラジオ放送開始とともにクロンチョン音楽がラジオ番組として取り上げられ、やがて社会にあまねくみちるようになっていったとして、もともと国籍不明であったクロンチョン音楽がインドネシア民族の音楽、国民の音楽に変貌を遂げた過程について考察している [土屋 1991: 193-195]。そして、クロンチョン音楽を、新しい様式の風景や大衆演劇とともに、インドネシアにおける文化統合を「草の根」のレベルですすめていくものとして評価している [土屋 1992: 115]。しかし、土屋はラジオ放送の詳細はもとより、クロンチョン音楽が当時のインドネシアの音楽文化の中でどのような地位を占めていたのかについて何ら具体的な根拠を示していない。そのため、十分な実証が行われないまま結論を急ぎすぎているとの印象が残る。⁷⁾ 本稿の検証・分析によって、これらの疑問点が明らかになることが期待される。

3) ムラユの意味についてはReid [2006] が要領よく纏めている。なお、現代インドネシアでムラユ音楽という場合は、北スマトラ地方の音楽、ムラユ・デリ（melayu deli）を指し、ダンドウットと区別している。他方、テレビの音楽番組では1950年代に流行したムラユ音楽やザピン等のムラユ音楽のリズムを取り入れたダンドウットを、「ムラユのリズム（irama melayu）」として紹介する場合もある。

4) 田子内 [1997; 1998] 参照。

5) クロンチョン音楽についてはKornhauser [1978] 参照。

6) 蘭領東インド時代のインドネシア音楽研究については、クンストによるジャワ音楽（特にガムラン音楽）に対する研究 [Kunst 1973] やパサリブによる音楽論 [Pasaribu 1955] がある。インドネシア音楽史編集委員会発行のインドネシア音楽史 [PENSI 1983] は蘭領東インド時代からの音楽史を包括的に記述しようとする試みであり、有益な情報を提供している。しかし、手法は当時の音楽関係者への聞き取り調査が中心で同時代資料をほとんど利用していないため断片的であり、全体像が把握しにくいという欠点がある。

第4点は、インドネシアのメディア史に対する貢献である。蘭領東インド時代のラジオ放送に関する英文の論文はこれまで幾つか発表⁸⁾されているが、日本ではほとんど紹介されていない。そのため、当時、東洋放送のオーナーシップを巡ってNIROMとインドネシア人放送局の間で長期に亘る綱引きが行われていた事実はほとんど知られていない。一方、これら英文の論文も、NIROMからRRIに至る歴史の流れを辿るという通史的なもの、あるいは、独立戦争時代にRRIが果たした役割に焦点を当てたものがほとんどで、ラジオ放送の番組自体に焦点を当てた研究は皆無と断言していい。例外的にムラゼックがNIROMの番組構成について簡単に言及しているが、オランダ語放送のみを対象にしており、インドネシア語放送については全く触れていない [Mrazek 1997: 21]。ラジオの番組内容を分析するには、人気の高い番組を抽出する作業だけでは不十分で、当時のラジオ放送を取り巻く政治・社会情勢をきちんと認識することが必要になる。このような認識の下、本稿では蘭領東インド時代のラジオ史について詳しく整理することから始める。この整理によってインドネシアのメディア史における空白部分がある程度埋まることが期待される。

なお、筆者が入手した『NIROMの声』は雑誌全体からみればごく僅かであり、本稿によって1934年から1942年までのインドネシア音楽文化の全体像が完全に明らかになるとは考えていない。理想的には全ての号を対象にすべきであるが、限定的であるにしろ、当時の音楽文化に対して具体的な情報を提供できると考える。また、偶然ではあるが、1936年と1942年は後述するように、それぞれの放送主体が大きく変化した時期でもある。蘭領東インドを取り巻く国際政治情勢も全く異なる。そのため、比較という意味でも両期間の番組傾向を考察・分析することは十分意義があると考ええる。

II 蘭領東インド時代のラジオ放送

1. ラジオの発展とオランダ

ラジオ放送はまずアメリカで発展した。世界最初の正式な公共ラジオ放送は、1920年11月2日にアメリカ・ペンシルバニア州で放送を開始したKDKA局(中波)と言われている。1922年以降、ラウド・スピーカー付き受信機が量産されるようになると、ラジオ受信機は「家電」として誰でも気楽に利用できる娯楽装置としてアメリカの各世帯に一気に普及した。1925年

7) 土屋は、ラジオ放送がクロンチョン音楽の流行に拍車をかけ [土屋 1991: 127]、インドネシア・ナショナリズムの形成にも重要な役割を果たしたと考えていたが [土屋 1994: 48]、ラジオ放送自体についてはほとんど述べていない。

8) 例えば、Drew O. McDaniel [1994], Colin Wild [1987], Jennifer Lindsey [1997], Rudolf Mrazek [1997], Krishna Sen and David T. Hill [2000]。

のアメリカにおける世帯普及率は10%を超え、大恐慌の1929年には35%、第二次世界大戦勃発の1939年時には80%に達した〔佐藤 2001: 147-148〕。ラジオ受信機の量産は、既に量産体制に入っていたレコード産業の発展と呼応する形で、録音された大衆音楽の配給に大きな役割を果たし、世界中の人々に未知の音楽を聴く機会を与えることになった。不特定多数のリスナーの嗜好に合せた大衆音楽の商業化が始まり、新しい音楽が移動する速度が飛躍的に上昇した。このようなラジオの発展は音楽の伝達技術や商品宣伝のあり方、個々人の生活スタイル、音楽生産と消費の関係などに大きな影響を与え、現代のインターネットに匹敵するような「変革」を社会にもたらしたのである。

アメリカにおけるラジオの発展はオランダにも波及した。オランダは他のヨーロッパの植民地宗主国の中では、いち早く植民地と本国との通信に成功した国であり、1918年には無線通信によるオランダとジャワ間の直接通信が既に開通していた。1923年には蘭領東インドの西ジャワ、バンドン郊外のマラバル（Malabar）丘に当時としては驚異的な2,400kwの送信機が設置され、蘭領東インドとアムステルダムとの常時通話が可能となっていた。そして、1927年には、フィリップ社の送信機を使った短波ラジオ民間放送が開始された〔McDaniel 1994: 26〕。この短波放送はオランダ本国から海外植民地向けに行われたもので、同年3月11日にはジャワ島で受信に成功している。これが世界初の短波ラジオ放送と言われている。同年6月2日にはオランダのヴィルヘルミナ女王（1880-1962）が短波ラジオ放送を通じて蘭領東インド向けに初めて演説を行った〔Wild 1987: 18〕。この短波放送局が1929年に蘭・蘭領東インドフィリップス放送局（PHOH: Philips Omroep Holland-Indië）を開設し、オランダ中部の都市、ヒルフェルスム（Hilversum）から蘭領東インド在住のオランダ人向けに定期放送を開始した〔*ibid.*: 20-21〕。

2. 蘭領東インドにおけるラジオの発展

オランダ本国におけるラジオの発展は蘭領東インドにも広がり、1920年代中頃にはアマチュア愛好家の間でラジオの試験放送を行う動きがみられた。オランダ政府はラジオ放送を本国と海外植民地を繋ぐ重要なメディア、あるいは植民地政府内の情報伝達手段として重視したため、アマチュア愛好家の動きに対しては当初、寛容的な態度を示した。これは、ラジオの役割に懐疑的な態度をとり、ラジオ放送を植民地政府の管理下に置いた英領マラヤ政府⁹⁾や仏領インドシナ政府の方針とは対照的である〔*ibid.*: 20〕。このような方針の違いはラジオ受信機の普及状況からも明らかである。1929年の蘭領東インドのラジオ受信機保有台数は2,132台であったのに対し、英領マラヤのそれはわずか119台であった。9年後の1938年には、蘭領東インド

9) BBCが南及び東南アジア向け放送を開始したのは1932年末。

の保有台数が7万台を超えていたのに対し、英領マラヤは1万2千台に留まっていた [McDaniel 1994: 27-28,42]。

オランダ本国から蘭領東インド向けの短波放送が開始される2年前の1925年6月16日、バタビア（現ジャカルタ）でオランダ人アマチュアラジオ愛好家グループがバタビア・ラジオ連合（BRV: Bataviasche Radio Vereniging）を設立し、オランダ語で音楽娯楽番組の放送を開始した。これが、蘭領東インドにおける最初のラジオ放送である [Anonymous 1953: 11]。1930年のリスナーからの報告によると、BRVは毎晩6時30分から2時間放送を行っていた [McDaniel 1994: 25]。また、バンドンでは1930年代初めにバンドンラジオ協会（Bandoeng Radio Society）が設立され、オランダ語による放送を開始した。番組は西洋ダンス音楽が中心であったが、週1回はクロンチョン音楽も放送された。1932年にはオランダ語放送(5.2mHz)の他にインドネシア語及び中国語による放送(9.6mHz)も開始し、アマチュアラジオ局の中では最も質の高い放送局と言われていた [ibid.: 33]。1933年には子供向け番組やオーケストラのライブ放送も行い、オランダ語放送にもかかわらず蘭領東インドだけでなく英領マラヤでも人気を博した¹⁰⁾ [The Straits Times 1932b]。ラジオ愛好家によるラジオ局設立の動きはジャワ島外にも拡大し、1930年頃、北スマトラのオランダ人実業家メーヤー（Meyer）がメーヤーラジオ局（MOVA: Meyers Omroep Voor Allen）を設立し放送を開始した。更に、1932年頃にはオランダのプランテーション企業らが中心となって、メダンラジオ協会（AVROM: Algemeene-Verenigning Radio Omroep Medan）が設立され放送を開始した [Anonymous 1953: 171]。両放送局は主にヨーロッパ音楽を放送したが、クロンチョン音楽も放送したことが確認されている [McDaniel 1994: 38]。MOVAとAVROMは1934年にNIRONがメダン中継所を設立した際、これに合流する形で組織を解散した [Anonymous 1953: 171]。

蘭領東インドにおけるラジオ局設立の動きは経済的に豊かなオランダ人が先行していたが、1930年以降になるとインドネシア人の手によるラジオ放送局の設立も活発化した。1933年4月1日、中部ジャワ、スラカルタ（ソロ）で、インドネシア人による初の本格的なラジオ放送局、ソロラジオ組合（SRV: Solosche Radio Vereniging）が設立された。SRV設立に至る経緯は次のとおりである。1908年に設立されたインドネシア最初の民族主義団体「ブディ・ウトモ（Budi Utomo）」にスルヨスパルト（Surjosuparto）の名前で参画した経験のあるソロのマンクヌゴロ七世（Mangkunegoro VII）は、ジャワ伝統芸能の愛好家としても知られていた。マンクヌゴロ七世は民族主義の覚醒のためにはジャワの伝統文化の推進が重要と考えた。彼は新しいメディアであるラジオに当初より関心を抱き、遠く離れたオランダから放送されたヴィルヘルミナ女王のラジオ演説にかなりの衝撃を受けたと言われている。このような経緯もあり、

10) 協会のメンバーは毎月2.5ギルダーを会費として支払うことを期待されていたが、実際に支払われたのか、また、どのような方法で支払っていたのか不明。

マンクスゴロ七世は、BRVジョクジャカルタ中継所から譲り受けた中古のラジオ送信機をソロのマルディ・ララス（Mardi Raras 音域訓練）と呼ばれるジャワ文化サークル（Javaansche Kunst-Kring）に寄贈し、バルカンバン・マナハン公園（Taman Balekambang Manahan）で演じられたクトプラッ、（ketoprak）¹¹⁾ やワヤン・オラン（wayang orang）を放送させた。しかし、当時のソロにおけるラジオ保有台数はわずか20台足らずで、保有者は貴族階級に限られていた。そのため、マンクスゴロ七世は一般民衆が自由に聴くことが出来るよう自分のラジオを宮殿敷地内に置く等の配慮を示した。宮殿敷地内に集まった一般民衆は毎週、不思議な箱の前から流れてくるジャワ語放送とガムラン音楽等を楽しんだ。しかし、マルディ・ララスが使用していた送信機は故障が多かったことから、マンクスゴロ七世はマルディ・ララス幹部に対して、新しいラジオ送信機を購入して本格的な放送を行うよう命じた。命を受けたサルシト・マゲンクスモ（Sarsito Mangunkusumo）は1933年4月1日、サークルのメンバーとソロの資産家達を集め、新しいラジオ放送局であるSRVをソロに設立することを決定した。協会の理事には設立資金を提供した華人資産家も含まれていた [Wild 1987: 18-19]。一方、1934年10月、ソロにもう一つのラジオ局、インドネシア・ラジオ放送（SRI: Siaran Radio Indonesia）が設立された。SRI設立の詳細については不明な点が多いが、¹²⁾ 放送局名にオランダ語ではなくインドネシア語を用いた点、また、インドネシアという用語を使用した点が興味深い。

一方、ジョクジャカルタでは、SRVの動きとは別の独自の放送局が設立された。1934年2月8日、ジャワ人貴族や華人、オランダ人計10名から成るラジオ局設立委員会が発足し、同月22日よりマタラムラジオ放送組合（MAVRO: Mataramse Vereniging voor Radio Omroep）の名前で試験放送（週3回）を開始した。同年3月4日、MAVROはSRVと協議を行い、同年12月14日以降、番組編成やリレー中継等で密接に協力することで合意した [Anonymous 1953: 13-14]。

ジャワ島ではこれらのラジオ放送局以外にも多くのアマチュア局が放送活動を行い、1930年代中頃には30の放送局が存在した [McDaniel 1994: 30]。アマチュアラジオ愛好家向けに発行された雑誌、『蘭領東インド・アマチュアラジオ愛好家連盟雑誌（*Orgaan van de Nederlandsche-Indie Radio Amateurs*）』は、当時としては驚異的な月間五千部以上の発行部数を記録した [Mrazek 1997: 15]。この数字からも、新しいメディアであるラジオに対する蘭領東インド住民の関心の高さが理解できるであろう。

それでは、蘭領東インドではどのくらいの数の住民がラジオを聴いていたのであろうか。

11) 中部ジャワで広く上演されているジャワ語による大衆音楽劇 [風間 1992: 147]。

12) 後に社会大臣を務めるムルヤディ・ジョヨマルトノ（Muljadi Djodomartono）がアナウンサーを務めたこと、丁子煙草事業者のニティセミト（Nitisemito）の支援を受けて、東ジャワのクドゥスに支局を開設したこと、SRVと較べて放送は小規模であったことがわかっている [Anonymous 1953: 118]。

表1 ラジオ受信機ライセンス（保有台）数
（単位：台）

年	ヨーロッパ人	インドネシア人	その他アジア人	計
1927	—	—	—	1,106
1928	—	—	—	1,567
1929	—	—	—	2,132
1930	—	—	—	2,464
1931	—	—	—	2,780
1932	—	—	—	4,844
1933	—	—	—	8,580
1934	—	—	—	16,875
1935	19,020	4,411	4,135	27,566
1936	25,681	7,259	6,088	39,028
1937	32,756	12,238	9,468	54,462
1938	39,919	18,173	12,817	70,909
1939	45,039	25,608	16,863	87,510
1940	50,054	31,539	20,275	101,868

出所：[*Indisch Verslag* 1941: 461]

まず、ラジオ受信機保有台数の推移（表1）からみてみよう。1940年のラジオ保有率は、1930年の蘭領東インドの全人口60,727,233人をベースに計算するとわずか0.17%である。この数字は米国の80%（1939年）や日本の45.8%（1941年）と較べるとはるかに低い。また、保有台数には地域的な偏りもみられ、都市部と農村部の格差もかなりあったと推測される（表2）。その理由の一つがラジオ受信機の価格である。1940年当時のラジオ受信機（Tosco PHILIPS）の価格は119ギルダー [ibid.: 7] で、¹³⁾ 当時のインドネシア人の平均月収が30ギルダー程度であったことを考えれば [Esha 2005: 12]、ラジオはかなり高額な商品であった。¹⁴⁾ しかし、ラジオの保有率が低いからといって、必ずしもラジオのリスナー数が少なかったと断言できるわけではない。戦後の日本におけるテレビ放送のように、1台のラジオが100人以上のリスナーで共有される場合もある。事実、ソロの王宮広場には毎日多くの住民が集まって1台のラジオから流れる放送に耳を傾けていた。ラジオ放送は一義的には所得水準の高い住民が楽しむものであったが、それは必ずしも独占的なものではなく、リスナーの裾野は想像以上に広がったと考えるべきであろう。

それではリスナー側はラジオ放送をどのように受容していたのだろうか。当時のラジオ放送の様子は大衆小説の中でも描かれており、これによってリスナー側のラジオ放送に対する反応の一端を窺い知ることができる。例えば、1939年に発行されたジャワ人作家ムハマド・ディ

13) 『NIROM の声』1936年第20号の表紙広告にはフィリップ製ラジオ（951A）が月6.95ギルダーの分割払い（支払い月数は不明）で購入可能とある。

14) グラムフォン・プレーヤーの価格は10ギルダーで、グラムフォン1枚の価格は2～2.5ギルダーであった [Yampolsky 1999: 2]。

表2 地域別ラジオ受信機保有台数（1940年）

（単位：台）

	ヨーロッパ人	インドネシア人	その他アジア人	計
バンテン	170	241	96	507
バタビア	9,397	4,094	3,460	16,951
ボゴール	2,245	845	825	3,915
バンドン	7,464	4,111	1,550	13,125
チレボン	521	427	443	1,391
西ジャワ計	19,797	9,718	6,374	35,889
ブカロガン	572	612	605	1,789
スマラン	2,827	2,473	1,767	7,067
レンバン	357	564	472	1,393
パニュマス	505	581	383	1,469
クドゥ	1,082	551	520	2,153
中部ジャワ計	5,343	4,781	3,747	13,871
スラバヤ	6,811	4,877	2,692	14,380
ボジョネゴロ	88	239	176	503
マディウン	445	453	201	1,099
クディリ	820	629	437	1,886
マラン	3,916	1,373	971	6,260
ブスキ	834	549	391	1,774
マドゥーラ	248	325	170	743
東ジャワ計	13,162	8,445	5,038	26,645
ジョクジャカルタ	1,222	1,551	461	3,234
スラカルタ	912	1,907	733	3,552
ジャワ小計	40,436	26,402	16,353	83,191
ランブン	212	131	109	452
パレンバン	1,214	1,073	476	2,763
ジャンビ	144	116	80	340
北スマトラ	2,451	900	688	4,039
ブンクル	146	143	87	376
西スマトラ	850	685	252	1,787
タバヌリ	164	195	77	436
アチェ	666	229	124	1,019
リアウ	251	155	147	553
バンカ・ピリトン	379	208	360	947
スマトラ計	6,477	3,835	2,400	12,712
南東ボルネオ	238	295	355	888
西ボルネオ	975	524	448	1,947
ボルネオ計	1,213	819	803	2,835
マナド	436	48	232	716
セレベス	790	248	226	1,264
マルク	419	47	106	572
チモール	151	29	38	218
バリ・ロンボック	132	111	117	360
計	1,928	483	719	3,130
外島小計	9,618	5,137	3,922	18,677
総計	50,054	31,539	20,275	101,868

出所：[Indisch Verslag 1941]

ムヤティ (Muhammad Dimiyati)¹⁵⁾ の小説、『ラジオ放送の舞台裏 (*Dibalik Tabir Gelombang Radio*)』は、西スマトラ出身の若者アミルの苦い青年時代の様子を描いている。ラジオ放送に夢中になりすぎてバタビアの高校を中退したアミルは、ラジオの契約女性歌手アンナと同棲生活を始める。アミルは、購入した高価なラジオの前でアンナの歌声を毎晩探して聞かすが、アンナは無情にも元の恋人のところに戻っていく [Mrázek 1997: 17–18]。また、1940年にメダンで発行されたダムフル (A. Damhoer) の小説、『NIROM 放送 (*Zender NIROM*)』は、『NIROM の声』を片手に、バタビア局とメダン局の放送からお気に入り歌手の歌声を探す若い姉妹の愛憎関係を描いている。NIROM メダン局専属のガンブス (gambus) 音楽 (後述) の歌手、ヤジッドに夢中になる姉ヌルチャヤは、ファンレターをきっかけにヤジッドと緊密な関係になった妹ヌルハワに嫉妬し、ついにはヤジッドの毒殺を画策してしまう。この小説には、当時人気の高かったクロンチョン歌手の実名¹⁶⁾ も登場し、NIROM メダン局にはインドネシア国内からだけでなく、マレー半島やタイ、ビルマからもファンレターが届いていたという [Damhoer 1940: 60–62]。これらの小説から、ラジオ放送は既に住民の生活に入り込み、人気の高い音楽番組や歌手は社会現象を引き起こしていた様子が窺える。また、ラジオ受信機はジャワだけでなくスマトラにも広く普及し、スマトラでもバタビア放送が受信できたこと、更には、メダン放送局はマレー半島でも広く受信できたこと等の当時の状況が確認できる。つまり、ラジオは、少なくとも1930年代後半以降、新しい音楽文化を創る重要なメディアとしてインドネシア社会から広く認知され始めていたのである。

3. NIROM 設立

東インド政庁は、低出力で他の放送局と混線しない限りは、基本的にアマチュア放送局に対して寛容な方針を採った。しかしアマチュア放送局の急増に伴い、各局が互いに隣接する周波数を使用した結果、放送が混線する事態が生じた。1934年、東インド政庁は、このような事態を改善するために『ラジオ法 (Radiowet)』を公布し、すべての放送局を管理下に置いた。すべての放送局は、他の放送局と混線しないよう政府から特定の周波数を割当てられ、放送出力も低く制限された。その結果、英領マラヤで受信可能であったジャワのアマチュアラジオ放送は、受信困難になった [*The Straits Times* 1934]。1934年4月1日、東インド政庁は全国放送ネットワークのNIROMを設立し、ジャワ島各地 (バタビア、バンドン、ソロ、スマラン、スラバヤ) で既に放送を行っていた放送局をこのネットワークに組み入れた [McDaniel 1994:

15) ディムヤティ (1912–58) はジャワ出身。幼少の頃から耳と口に障害を抱えていたが、新聞記者及び大衆小説家として活躍した [*Ensikopedi Nasional Indonesia* 1989: (4) 357]。

16) 例えば、アブドゥラー (S. Abdoellah) やユーリス (Miss Eulis) (後述)。

39-40]。NIROM には 5 年間の特別放送ライセンスが付与され、ラジオ受信機保有者からの受信料 (luisterbijdrage) の徴収が許可された。蘭領東インドの全てのラジオ受信機保有者は NIROM への登録が義務づけられ、月 1.5 ギルダー (guilders) の受信料を NIROM に納めなければならなかった。¹⁷⁾ 1934 年のラジオ受信機登録台数は 16,875 台 (表 1) で、仮に受信料徴収率を 100% とすると、NIROM の受信料収入は 25,312.5 ギルダーとなる。ラジオ受信機登録台数は 1 年後の 1935 年には 2 倍弱にまで増加し、NIROM の受信料収入も 41,349 ギルダーと飛躍的に増加したと思われる。NIROM はこの収入を基に送信機材の増強を行うとともに、ソロとジョクジャカルタ、マラン、スカブミ、ボゴール、パダンに中継所を設置した [*Ensiklopedi Nasional Indonesia* 1989: 34]。一方、NIROM 以外の放送局は受信料徴収が認められず、メンバー会費だけで経営を維持しなければならなかった。その結果、各放送局の経営基盤は著しく不安定なものになった。

NIROM の設立目的は東インド政庁の政策を的確に東インド国民に伝達することにあった。また、オランダ本国政府からの行政情報を伝達し、蘭領東インドのオランダ国民とオランダ本国との関係を維持すること、更には、最新の西洋文化を彼らに紹介することも意図されていた [Lent 1978: 164]。これらの目的を果たすため NIROM の各放送局には広い範囲で受信可能な短波が割り当てられ、これに対し既存のアマチュア放送局には受信範囲が狭い中波が割り当てられた [McDaniel 1994: 40]。NIROM の放送は 1935 年にはジャワ全土で受信可能となり、1930 年代後半以降にはジャワ島から発信されるラジオ放送は蘭領東インドのほぼ全域で受信可能となった。受信状態は必ずしも良好というわけではなかったが、「ラジオ放送を聴くことができる範囲が蘭領東インド」という新しいコンセプトも生まれるほどであった [Mrazek 1997: 9]。

1934 年 3 月 31 日から放送を開始した NIROM の放送番組は、オランダ人を中心とする欧米人向け番組とインドネシア人対象の東洋番組から構成されていた。しかし、中心はあくまで欧米人向け番組であり東洋番組の割り当てはかなり少なかった。このような状況に懸念を感じたソロの SRV 幹部は東洋番組に対する需要が高いと判断し、¹⁸⁾ 1934 年 4 月 8 日に幹部会合を開いてバタビア SRV 支部 (Kring der SRV Batavia)、そして同年 4 月 30 日にはバンドン SRV 支部 (Kring der SRV Bandoeng) をそれぞれ設立し東洋番組の放送を開始した。バンドン SRV 支部は設立後すぐに独立し、東洋ラジオリスナー組合 (VORL: Vereniging voor Oosterse Radio Luisteraars, 135m) に改称した。その後、SRV 本部とバタビア SRV 支部、VORL は会合を

17) 受信料は郵便電報局 (PTT) が代理徴収を行った。PTT は受信料 1.5 ギルダーから手数料として 0.25 ギルダーを受け取ったため、NIROM が徴収した実際の受信料は 1.25 ギルダーであった [Wild 1987: 21]。

18) 例えば、ソロの SRV はリスナー登録者が 4,000 人を超え、独自のスタジオ兼事務所を建設するほどであった [Anonymous 1953: 14]。

重ね、NIROM 幹部とリスナーを招いて東洋番組の今後のあり方について協議を行った。そして、1934年10月31日の会合で、東洋番組の放送を1935年1月1日よりNIROM からVORL に移譲することが決定された。¹⁹⁾ この決定を受けて、バタビアSRV 支部は東洋ラジオ放送組合 (VORO: Vereniging voor Oosterse Radio Omroep, 88m) に名称を変え、東洋番組の放送権限をVORL から受け継いだ [Esha 2005: 24]。これ以降、東洋番組を放送するインドネシア人放送局がジャワ島各地で設立された。1935年にはスラバヤでスラバヤ東洋ラジオリスナー組合 (VORS: Vereniging Oostersche Radio-luisteraars Soerabaja) が設立され、1936年に東ジャワ華人ラジオリスナー組合 (CIRVO: Chinese Inheemse Radio-luisteraars Vereniging Oost Java) に改編された。スマランではSRV スマラン支局 (SRV Kring Semarang, あるいはRadio Semarang) が1936年から放送を開始した²⁰⁾ [Anonymous 1953: 13]。

東洋番組の移譲にあたって、NIROM はインドネシア人ラジオ局 (総称して東洋ラジオ局 (Radio Ketimoeran) と呼ばれた) に補助金を与え、彼らが制作する番組をNIROM 第二放送として放送する方針を採った [Wild 1987: 21]。多くの東洋ラジオ局は慢性的な資金不足に苦しんでいたこともあり、NIROM のこの提案に同意した。同意したのは、VORO (バタビア) とMAVRO (ジョクジャカルタ)、SRV (ソロ)、SRV スマラン支局の4局で [Soeara NIROM 3(20) 1936a: 3]、バンドンのVORLはこの申し出を拒否した [Anonymous 1953: 47]。そのためバンドンではNIROM が番組を直接制作し、全国放送 (Nusantara) として放送を行った。NIROM はスラバヤでも番組を直接制作したが、これは東洋ラジオ局VORSが必ずしも協力を拒否したからではない。NIROM スラバヤ放送の番組編成に必要なアドバイスを行う諮問委員会 (Badan Commissie van Advies) に対し、VORSから東洋ラジオ局代表として2名参加していた事実が示すように、²¹⁾ NIROM とVORSの間には一定の協力関係が存在したようである [Soeara NIROM 3(20) 1936a: 3]。

4. レコード産業の発展

1930年代の急速なラジオ放送の発展を支えたのが、レコード産業の急速な発達である。NIROM は受信料を支払うリスナーのために『NIROM の声』を定期的に発行し、番組内容を事前にリスナーに周知させる必要があった。それを可能にしたのが19世紀末に発明されたグラモフォン (以下、レコード) である。生演奏番組と較べて安定的な放送を保障できるレコー

19) 東洋ラジオ局の番組は基本的にローカル言語で行われた。例えば、バタビアのVOROではマレー (インドネシア) 語に加え、ジャワ語とスンダ語も使われた [Esha 2005: 27]。

20) その他、マディウン、プルウォケルト、ボゴールにも放送局が設立されたが、いずれも短命に終わった [Anonymous 1953: 13]。

21) 諮問委員会のメンバーは、NIROM の任命委員3名、VORS 2名、NIROMより2名の計7名より構成されていた。

ドは、ラジオ放送にとって不可欠の番組リソースであった。一方、レコード産業にとってもラジオ放送はレコード生産者と消費者を仲介する重要な媒介物であり、宣伝にとって不可欠のメディアであった。

レコード産業は、円盤型レコードの発明によって1890年代以降飛躍的に発展した。欧米で設立された多くのレコード会社は世界各地を巡回して各地の音楽を録音し、その録音をもとにレコードを生産・販売した。東南アジアでは、1900年代初めに英グラモフォン（The Gramophone Co.）社から派遣された録音技師ガイズバーグ（Fred Gaisberg）が初の巡回録音活動を行っている。ガイズバーグは1903年にバンコク、シンガポール、ラングーン（現ヤンゴン）を訪れ、タイ音楽やジャワ音楽、ムラユ音楽、ビルマ音楽を多数録音した [Tan 1996/97: 1-2]。これが、東南アジアにおける初のレコード制作である。グラモフォン社は1910年までに、ジャワ音楽のレコードを93枚生産した [Gronow 1981: 255]。また、1906年1月には、ドイツのレコード会社ベカ（Beka）のハインリッヒ・ブン（Heinrich Bumb）がシンガポールとバタビアを訪れ、スタンブル（Stamboel）やジャワ（ガムラン）音楽を多数録音した [Tan 1996/97: 2]。スタンブルはクロンチョン音楽のスタイルの一つであることから、クロンチョン音楽が初めてレコード化されたのは1906年ということになる。その後、ドイツの別のレコード会社、オデオン（Odeon）などが市場に参入し、1942年までに蘭領東インド及び英領マラヤで生産されたローカル音楽のレコードは約1万枚とも言われている [Yampolsky 1999: 1]。レコードはジャワ島外でも流通しており、例えば、1929年に西スマトラで発行された新聞にはクロンチョン女性歌手リブット（Miss Riboet）²²⁾らのレコードの広告が掲載されている [Suryadi 2003: 55]。

レコード産業の発展は音楽の内容自体にも大きな影響を与えた。クロンチョン音楽を例にとると、1900年代初めのクロンチョン音楽のレコードには、単に「男性（man）」や「女性（woman）」「ユーラシアン（Eurasia）」²³⁾の記載があるだけで、歌手名は全く記載されていなかった。1900年代初めは、大衆演劇コメディ・スタンブル（Komedi Stambul）²⁴⁾がジャワで流行し始めていた時代であり、劇中では過去から脈々と歌い継がれてきたクロンチョン音楽が好んで歌われた。このようなクロンチョン音楽が当初レコード化されたのである。そこでは、有名なクロンチョン音楽の歌自体が重要であり、歌い手が誰かというのは問題ではなかった。

22) 女性歌手の名前の前に敬称の“Miss”をつける習慣は、1920年代から40年代前半にかけて蘭領東インドや英領マラヤで広く行われていた。これはレコード録音できる女性歌手は「有名人」とみられていたからである [Tan 1996/97: 7]。

23) 吉岡修氏が開設しているHP “Map of Indonesian Pop” にクロンチョン音楽に関する部分があり (<http://www2.u-netsurf.ne.jp/~pd53618/kroncong/kroncong.html>)、その中で初期のクロンチョン音楽のレコードのジャケットを見ることが可能。

24) 1891年、スラバヤでアグストゥ・マヒュー（August Mahieu）らによって結成された大衆劇団。1906年に解散したが、その後も類似の劇団がバタビアを中心に数多く結成された [田子内 1997: 143-146]。

ところが、コメディ・スタンブルは1925年のオリオン(Orion)の結成により大きな転機を迎える。オリオンは、大衆に広く知られている物語を演劇の題材にする習慣を止め、専属脚本家を採用して劇団独自の物語を演じ、他の劇団との差別化を図った。そして、音楽も物語の内容に合わせて劇団独自のクロンチョン音楽を演奏した(図2)。オリオンの看板役者であるリブットは、そのまま人気歌手として大衆の人気を集めた[田子内 1997: 147-148]。このような差別化されたクロンチョン音楽はレコード産業にとっても好都合であった。レコードを商品として売り出し消費者を満足させるためには、これまでのクロン

チョン音楽とは異なる、より商品価値の高い音楽を提供する必要があったからである。²⁵⁾そして、少なくとも1920年代後半には、現代のように曲名と歌手名が記載されたレコードが制作されるようになった[Yampolsky 1999: 4]。このような動きは、濃淡の差があるにしろ他の音楽でも起こったと思われる。例えばムラユ音楽では、1900年初めにシンガポールやペナンで録音された曲はマレー大衆演劇バンサワン(bangsawan)の劇中で歌われた曲であった[Tan 1996/97: 3]。これらのレコードには歌手の記載はなく、あるのは曲名だけであった。歌手名がレコードにクレジットされるのは1920年代後半以降のことである[ibid.: 5-8]。

このような時期に開始されたラジオ放送は商業化された音楽の流通拡大にとって好都合のメディアであった。ラジオ放送を通じて音楽が世界各地に発信されたことで、これまでごく一部の富裕層に限られていた音楽愛好家の裾野が拡大し、レコード産業にとって新しい市場が生まれた。また、作曲者や演奏者達がラジオ放送を通じて様々な音楽に接する機会が増えたことで様々な相互作用が生じ、新しいスタイルの音楽が創り出される契機となった。このように、ラジオ放送の開始は音楽の世界に革新的な状況をもたらしたのである。

5. 東洋ラジオ組合連盟(PPRK)の設立

インドネシア人リスナーの数が順調に増加する中で、東洋ラジオ局が制作する番組の質の向上と人気の高さにNIROM経営陣と東インド政庁は大きな危機感を抱いた。東洋ラジオ局の人



図2 Miss Riboet “Orion” 公演の広告
出所: [The Straits Times 1930]

25) 例えば、曲の構成が14小節から28小節になり、歌詞も即興が可能な伝統的4行詩パントウン(pan-tun)が消え、固定された歌詞が採用されるようになった[Yampolsky 1999: 4]。この時期、ルバナ(rebana)からピッチカート・チェロへと楽器編成が変化[Kornhauser 1978: 134]したのも、このような動きの一環と考えられる。

気及び規模拡大は将来の東インド植民地社会の秩序維持にとって脅威になりうると感じていたのであろう。1936年、NIROMは翌年から全てのインドネシア語放送をNIROMが直接制作しスラバヤ局からのみ放送する方針を打ち出した。これは、NIROMから東洋ラジオ局への補助金減額、あるいは打ち切りを意味し、経営の維持を補助金に頼ってきた東洋ラジオ局に大きな衝撃を与えた [Anonymous 1953: 15]。例えば、パタピアのVOROはNIROMから毎月200ギルダの補助金を受け取っていたが、これはVOROの月額予算、600ギルダの3分の1を占めていた [Ensiklopedi Nasional Indonesia 1989: 35]。東洋ラジオ局は、ラジオ受信機登録台数の増加はNIROMの東洋放送の人気に拠るところが大きく、東洋ラジオ局との協力によってNIROMは受信料増収という恩恵を得ているにも拘わらず、補助金を削減、あるいは打ち切るのは言語道断と考えた。仮に、NIROMが補助金削減あるいは打ち切りを行えば、東洋ラジオ局はメンバー会費の引き上げを余儀なくされ、その結果多くのメンバーが脱会して東洋ラジオ局の経営状態が更に悪化するおそれがあった。²⁶⁾ そのため、MARVOとSRV、スマランSRV支局は、NIROMに対して逆に補助金増額を要請したが、却下された。この問題は全国的な関心事項となり、1936年11月19日、スタルジョ請願 (Petisi Sutardjo)²⁷⁾ で有名なスタルジョ・カルトハディクスモ (Sutardjo Kartohadikusumo) がフォルクスラート (国民参事会: Volksraad)²⁸⁾ で取り上げた。スタルジョは、東洋ラジオ局の安定的な経営基盤を確保するためにメンバー会費を引き上げる一方、当該メンバーの四半期毎のNIROM受信料を4.5ギルダから最大3ギルダに減額するよう提案した。東インド政庁はこの提案を拒否したが、NIROM東洋放送はいずれ東洋ラジオ局が組織する団体に移譲することを約束した [Anonymous 1953: 15-16]。

この約束を受けて、1937年3月28日、スタルジョとSRVのサルシトはバンドンにVORO、VORL、MARVO、SRV、CIRVOの5局の代表を集め、移譲の受け皿となる団体設立について協議を行った。そして同日、この5局とスマラン局をメンバーとする東洋ラジオ局組合連盟 (PPRK: Perikatan Perkumpulan Radio Ketimoeran) の設立が決定され、スタルジョが会長 (ketua)、サルシトが書記兼会計 (penulis/bendahara) にそれぞれ就任した。SRIは他の6局と

26) 例えば、パタピアのVOROの毎月の会費は1ギルダで、1938年のメンバー数は390名 (インドネシア人299名、中国人74名、アラブ人5名、オランダ人10名、その他2名) であったことから、毎月約400ギルダの収入があった [Esha 2005: 26]。東洋ラジオ局のメンバーはNIROMへのラジオ受信機登録料と東洋ラジオ局への会費の納入という二重の負担を強いられていた。

27) 1936年7月にスタルジョなど6名の議員が提出し、9月に採択されたフォルクスラート (注28参照) からオランダの女王と議会への請願。オランダ・東インド連合の枠内で自治達成に向けて斬新的改革のプランを作成するためのオランダと東インド対等の協議会の設置を求めるもの。1938年11月に拒絶された [石井 1991: 231]。

28) 1918年にジャカルタに開設された植民地議会。倫理政策の一つの柱である原住民の自治能力育成政策と本国から現地への権限委譲政策の一環であり、権限の点でも選挙権の点でも翼賛議会の域を出るものではなかった。1931年から原住民議員が半数を占めるようになった [石井 1991: 371]。

較べて組合(perhimpunan)と呼べる程大きな組織でなかったことからPPRKへの参加は見送ったが、PPRKに協力することを約束した。しかし、PPRKには公序良俗や国内治安、国内法及び国家の利益に違反するような政治放送活動は許されず、活動はインドネシア住民の心身の発展のために国民文化及び芸術を発展させる社会文化分野に限定された。つまり、ラジオを通じてナショナリズムを鼓舞するような放送はこれまで同様一切認められなかったのである[*ibid.*: 16-17]。このような東インド政庁の反応は、1930年代がインドネシアの反植民地運動にとって厳しい時代であったことを想起すれば当然のことと言える。1933年8月にはスカルノらパルディンド²⁹⁾幹部が逮捕され、1934年にはハッタ、シャフリルらインドネシア国民教育協会の幹部が逮捕される等、1930年代前半はオランダに対する非協調路線が閉塞させられていた。そして、1930年代後半になると、オランダはインドネシア人による政治運動を協調路線に封じ込めた。PPRKが組織名にインドネシアではなく東洋(Ketimoeran)を使用せざるを得なかった背景にはこのような厳しい政治状況があった。

PPRK結成後の1937年5月7日、スタルジョ会長と東インド政庁高官との間で、NIROMからPPRKへの東洋放送権限の移譲、及びPPRKとNIROMの今後の関係について協議が行われた。その結果、PPRKへの東洋放送権限移譲については合意されたものの、放送技術については移譲後もNIROMが引き続き担当することになった。しかし、NIROMからPPRKへの東洋放送の権限移譲はスムーズには進まなかった。1938年3月28日、東インド政庁は政府決定(No.A43/9/19)を公布し、PPRKの法人格(rechtspersoon)を認めたが、補助金の額を巡るPPRKとNIROMの対立等もあり、政府が最終的にPPRKへの東洋放送の権限移譲に同意したのは、2年以上の後の1940年6月30日であった[*ibid.*: 18-19]。

1936年以降の東洋放送のオーナーシップを巡る東インド政庁の対応は興味深い。NIROMは、1936年に一旦は東洋放送を自局で制作する方針を打ち出し、これまで協力関係にあった東洋ラジオ局との関係を打ち切ろうとした。しかし、1937年になると、一転して東洋放送の放送権を東洋ラジオ局に移譲する方針に転換した。当時の国内の政治状況から判断すると、東洋ラジオ局の反対、あるいはスタルジョからの圧力が理由でNIROMが方針変更を行ったとは考えにくい。むしろ、当時の国際情勢が背景にあったと考えるべきであろう。1936年、ヨーロッパではドイツ軍がラインラントに進駐し、ナチスドイツの脅威が目前に迫っていた。一方、アジアでは日独防共協定を締結した日本軍の中国侵攻が益々と激しくなっていた。このような状況の中、東インド政庁はジレンマに陥っていたと考えられる。仮に、近い将来、日本と蘭領東インドの間に緊張関係が発生した場合、インドネシア人からの支援なしには日本軍と対抗できない。そのためには東洋放送の権限について妥協してでも彼らから支持を得ることが得策と考

29) インドネシア党。1931年4月、解散した国民党を引き継ぐ形で結成された。

えた可能性がある [Wild 1987: 22]。他方、仮にラジオ放送で政治的活動を許可すると、沈滞していた反植民地運動に火をつけることになりかねない。その場合、東インド政庁は内憂外患の状況に陥ることになる。権限移譲の合意後も NIROM が正式な移譲を渋った背景には、PPRK が放送を政治的プロパガンダに利用するかもしれないという不信感が残っていたからではないか。NIROM が最終的に放送権を移譲した1940年6月30日は、オランダ本国がドイツ軍に侵攻された1カ月後であり、日本軍の東南アジア進駐が目前に迫っていた時期である。東インド政庁には、東洋放送の権限を巡る争いを一刻も早く解決してインドネシア人から支持を得る以外に道は残されていなかったのである。

1940年11月1日、PPRK は断食明け月大祭の日に念願の東洋放送を開始した [Anonymous 1953: 15–19]。NIROM の放送施設を引き続き使用していたものの、この日が名実ともにインドネシア人によるインドネシア人のためのラジオ放送の始まりと言えよう。³⁰⁾ 1941年1月11日、PPRK はクロンチョン音楽コンサートを開催し、その模様をライブ中継した。当時人気の高かったクロンチョン楽団、リーフ・ヤーファ (Lief Java : 愛しきジャワ) のメンバーがジャワ伝統衣装に身をまとして登場し、人気歌手のスアミ (Miss Soeami) やルキアらがクロンチョン音楽の流行歌を歌った [Mrazek 1997: 28]。しかし、PPRK の放送は長くは続かなかった。1941年12月8日、日本軍はマレー半島に上陸し、蘭領東インドへの侵攻は目前の脅威となった。1942年に入ると、NIROM は、東京と占領地域 (サイゴンやペナン) から発信される日本軍のプロパガンダ放送に対抗するため、PPRK と協力して正確な情報発信に腐心した [Soeara NIROM 9 (3) 1942c: 1]。しかし、1942年3月9日、蘭領東インドのオランダ軍はジャワ島に上陸した日本軍に全面降伏し、PPRK は NIROM とともに日本軍宣伝部に接収された。

PPRK はわずか1年5カ月余りの放送実績だけを残して姿を消した。しかし、東洋放送のオーナーシップを巡って NIROM と対立し最終的に権利を勝ち取ったという事実は、全ての民族主義運動が東インド政庁から圧殺された中で注目に値する出来事といえよう。

III 『NIROM の声』が描く音楽文化

この章では、『NIROM の声』における音楽番組の実態についてみていく。上述したように、NIROM の番組は、放送開始当初はインドネシア人の音楽嗜好を反映したものではなかったが、

30) PPRK は『Soeara Timoer (東洋の声)』というラジオ番組雑誌を1940年12月28日から定期 (隔週) 発行し、発行部数は4万部であった [Soeara Timoer 1 (1)]。NIROM も『Soeara NIROM』を発行していたため、東洋放送関係の番組雑誌は2種類存在していたことになる。なお、『東洋の声』の内容については稿を改めて考察したい。

1935年以降東洋番組の制作が東洋ラジオ局に移譲されたことから、これ以降の音楽番組は当時のインドネシア音楽文化状況をかなりの程度反映していると言えよう。例外はNIROMが直接番組を制作したバンドン放送局とスラバヤ放送局である。これらの放送局の音楽番組分析についてはより慎重な考察が必要であるが、以下の表からは少なくとも東インド政庁が両放送局の音楽番組編成に対して恣意的な影響力を行使していたとの傾向は読み取れない。

まず、表3では各放送局の放送主体、波長、放送時間をまとめた。波長のうち、100mを越えるものは周辺都市部を主な対象地域とする放送（Pemantjar Kota）で、100m以下は全国を対象地域とする放送（Pemantjar Archipel）として、それぞれ用いられた。以下、1936年と1942年の音楽番組について詳しくみていく。³¹⁾ なお、クロンチョン音楽、ムラユ音楽、アラブ（ガンプス）音楽の3ジャンルは本稿で扱う中心音楽であることから、歌手名、曲名、楽団名を『NIROMの声』よりそれぞれ抜粋し別表に掲載した。

表3 各ラジオ局の詳細情報

	放送局名	放送主体	波長 (m)	放送時間
1936年	全国/バンドン (Archipel)	NIROM	45/103	17:00-24:00 (月～金) 10:00-12:30, 16:30-24:00 (土) 10:00-14:00, 17:00-22:00 (日)
	バタビア (Batavia)	VORO	190	17:00-24:00 (月～金) 10:00-14:00, 17:00-24:00 (土日)
	ジョクジャカルタ (Djocja)	MARVO	128	18:00-24:00 (毎日)
	ソロ (Solo)	SRV	63	20:00-24:00 (毎日)
	スマラン (Semarang)	SRV	111	18:00-24:00 (毎日)
	スラバヤ (Soerabaia)	NIROM	31/95	6:30-7:15, 18:00-23:30 (月～金) 6:30-7:15, 12:00-14:00, 16:30-24:00 (土) 8:15-14:00, 17:00-23:30 (日)
1942年	全国 (Noesantara)	PPRK	20.5	17:00-24:00 (月～土) 6:00-14:30, 17:00-24:00 (日)
	西ジャワ (Djawa Barat)	PPRK	41.42/192/197	6:00-7:30, 12:00-14:30, 17:00-24:00 (月～土) 6:00-14:30, 17:00-24:00 (日)
	中・東ジャワ (Djawa tengah dan Timoer)	PPRK	128/61/129/ 120/189/41.30	6:00-7:30, 12:00-14:30, 17:00-24:00 (月～土) 6:00-14:30, 17:00-24:00 (日)
	メダン (Medan)	PPRK	41.61	7:00-8:00, 17:00-20:00 (毎日)

出所：Soeara NIROMより筆者作成。

注：放送時間は必ずしも一定ではなく、曜日や週によって若干長短がある。

31) 文中のインドネシア語表記は当時の表記（旧表記）にならった。

1. 1936年

表4は、1936年10月16～31日までの番組の内容を放送局別に数量化したもので、表5は、表4を基に音楽番組とその他の番組の比率を算出した。音楽番組は便宜的に主要6音楽（クロンチョン音楽、ジャワ音楽、スダ音楽、ムラユ音楽、中国音楽、アラブ音楽）とその他の音楽に分類した。番組数が多いが実際の放送時間は少ない場合もありうるため、表6では、番組時間数を放送局別に算出した。表7は表5同様、音楽番組とその他の番組の時間数比率を示している。

表4と表6で示した音楽番組のジャンルについては、いくつか説明が必要であろう。まず、これまで度々言及しているクロンチョン音楽は、16世紀以降バタビア北部のトグウ（Tugu）地区を中心に発展したポルトガル音楽の影響を受けた混成音楽で、いずれのエスニック・グループにも属さない音楽である。以下、スダ音楽からマナド音楽までは特定の地方音楽を指す。ガンドゥルン（Gandroeng）は東ジャワ・バニユワギ地方の音楽である。ガンバン・クロモン（Gambang Kromong）はバタビアの華人社会を中心に発展したアンサンブルで、中国本土の音楽にクロンチョン音楽などの様々な音楽要素を吸収して完成した音楽である。ティオン・ファ（Tiong Hwa）は中国音楽、アラブ&ガンプス（Arab & Gamboes）はアラブ音楽一般を指す。一方、ラジオトニール（Radiotooneel）は音楽ジャンルではなくラジオ劇を指すので注意が必要である。19世紀末の誕生以降、インドネシア各地で高い人気を得ていた大衆演劇コメディ・スタンブルやその系統を引くトニール（Tonil）³²⁾は、1930年代には新しいメディアであるラジオに活動の範囲を広げていた。本来は演劇であるが、劇中ではクロンチョン音楽を中心に様々な音楽が演奏されていたこともあり、ここでは音楽番組の一部として扱った。ワヤン&クトプラッ（Wayang & Ketoprak）も中部ジャワを中心に行われている演劇であり音楽ジャンルではない。劇中ではガムラン音楽が演奏されるのが通常であるが、あくまで演劇が主体であることからジャワ音楽には含めず、独立したジャンルとして扱った。クバラタン（Kebabatan）は西洋音楽一般を指す。クティムラン（Ketimoeran）はクロンチョン音楽やムラユ音楽等のインドネシア音楽全体を意味する用語である。グレジャ（Geredja）はキリスト教会の意味で、ここでは賛美歌等のキリスト教音楽を指す。ヒンドウスタン（Hindoestan）はインド北部の音楽を指す。

(1) 全体的傾向

まず、番組全体に占める音楽番組の割合からみていく。全体的な音楽番組の割合は、番組数で71.3%、番組時間数で83.8%と圧倒的に多い。なかでも、全国／バンドン、バタビア、ソロ

32) コメディ・スタンブルやバンサワンなどの演劇の別名。オランダ語の Toneel が語源。

表4 放送局別音楽番組数（1936.10.16～31）

（単位：本）

	全国／ バンドン	バタビア	ジョク ジャカルタ	ソロ	スマラン	スラバヤ	合計
クロンチョン音楽（Krontjong）	20	26	3	3	4	25	81
スندا音楽（Soenda）	20	17	3	0	2	6	48
ジャワ音楽（Djawa）	22	14	17	9	19	19	100
ムラユ音楽（Melajoe）	11	14	1	0	11	3	40
中国音楽（Tiong Hwa）	11	15	0	0	5	12	43
アラブ音楽（Arab & Gamboes）	13	18	0	0	2	9	42
バリ音楽（Bali）	1	1	0	0	0	3	5
アンボン音楽（Ambon）	1	4	0	0	0	1	6
マナド音楽（Menado）	0	0	0	0	0	1	1
ガンドゥルン（Gandroeng）	0	1	0	0	0	1	2
ガンバン・クロモン （Gambang Kromong）	4	16	0	0	0	1	21
ハワイ音楽（Hawaiian）	10	7	0	0	0	11	28
インド音楽（Hindoestan）	4	3	0	0	2	3	12
タイ音楽（Siam）	2	0	0	0	0	0	2
東洋音楽（Ketimoeran）	3	0	19	0	1	0	23
ワヤン&クトブラッ （Wayang & Ketoprak）	6	5	4	3	3	15	36
ラジオ劇（Radiotooneel）	3	3	0	0	1	1	8
日本音楽（Djepang）	0	2	0	0	3	0	5
西洋音楽（Kebartan）	0	0	3	0	0	2	5
教会音楽（Geredja）	0	2	0	0	0	0	2
音楽番組計	131	148	50	15	53	113	510
その他番組	11	22	29	3	17	65	147
ニュース（Berita）	16	14	0	0	14	14	58
合計	158	184	79	18	84	192	715

出所：Soeara NIROM より筆者作成。

表5 放送局別主要音楽番組数等の比率（1936.10.16～31）

（単位：%）

	全国／ バンドン	バタビア	ジョク ジャカルタ	ソロ	スマラン	スラバヤ	全体の 比率
主要6音楽*	61.4	56.5	30.4	66.7	51.2	38.5	49.5
その他音楽	21.5	23.9	32.9	16.6	11.9	20.3	21.8
音楽番組計	82.9	80.4	63.3	83.3	63.1	58.8	71.3
その他番組	7.0	12.0	36.7	16.7	20.2	33.9	20.6
ニュース	10.1	7.6	0.0	0.0	16.7	7.3	8.1
合計	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0

出所：Soeara NIROM より筆者作成。

* 6音楽とは、クロンチョン音楽、スندا音楽、ジャワ音楽（ワヤン&クトブラッを含む）、ムラユ音楽、中国音楽、アラブ音楽（ガンプスを含む）を指す。

表6 放送局別音楽番組時間数（1936.10.16～31）

（単位：分）

	全国／ バンドン	バタビア	ジョク ジャカルタ	ソロ	スマラン	スラバヤ	合計
クロンチョン音楽（Krontjong）	850	1,110	690	690	765	1,520	5,625
スンダ音楽（Soenda）	1,055	960	60	0	60	210	2,345
ジャワ音楽（Djawa）	1,030	835	1,990	1,710	2,100	1,705	9,370
ムラユ音楽（Melajoe）	545	415	30	0	330	75	1,395
中国音楽（Tiong Hwa）	380	350	0	0	150	420	1,300
アラブ音楽（Arab & Gamboes）	315	570	0	0	60	305	1,250
バリ音楽（Bali）	15	20	0	0	0	45	80
アンボン音楽（Ambon）	45	105	0	0	0	45	195
マナド音楽（Menado）	0	0	0	0	0	0	0
ガンドゥルン（Gandroeng）	0	15	0	0	0	20	35
ガンバン・クロモン （Gambang Kromong）	225	515	0	0	0	75	815
ハワイ音楽（Hawaiian）	425	130	0	0	0	225	780
インド音楽（Hindoestan）	60	40	0	0	60	40	200
タイ音楽（Siam）	60	0	0	0	0	0	60
東洋音楽（Ketimoeran）	450	0	575	0	120	0	1,145
ワヤン&クトブラッ （Wayang & Ketoprak）	420	400	900	900	660	615	3,895
ラジオ劇（Radiotooneel）	265	420	0	0	285	330	1,300
日本音楽（Djepang）	0	35	0	0	90	0	125
西洋音楽（Kebartan）	0	0	120	0	0	210	330
教会音楽（Geredja）	0	20	0	0	0	0	20
音楽番組計	6,140	5,940	4,365	3,300	4,680	5,840	30,265
その他番組	340	740	1,185	240	900	1,525	4,930
ニュース（Berita）	240	280	0	0	210	210	940
合計	6,720	6,960	5,550	3,540	5,790	7,575	36,135

出所：Soeara NIROM より筆者作成。

表7 放送局別主要音楽番組時間数等の比率（1936.10.16～31）

（単位：%）

	全国／ バンドン	バタビア	ジョク ジャカルタ	ソロ	スマラン	スラバヤ	合計
主要6音楽	62.1	60.9	49.9	67.8	59.8	55.9	58.9
その他音楽	29.3	24.4	28.7	25.4	21.0	21.2	24.9
音楽番組計	91.4	85.3	78.6	93.2	80.8	77.1	83.8
その他番組	5.0	10.7	21.4	6.8	15.6	20.1	13.6
ニュース	3.6	4.0	0.0	0.0	3.6	2.8	2.6
合計	100.0	100.0	100	100.0	100.0	100.0	100.0

出所：Soeara NIROM より筆者作成。

の比率が高い。音楽番組以外のその他の番組は30%足らずで、詩の朗読、御伽話、海外紹介、イスラーム教の礼拝の呼びかけ(azan)、宗教講話、健康案内等である。その他、ジョクジャカルタとソロを除く放送局では、ほぼ毎日1回、15分程度のニュース(新聞の内容を紹介するもの)を放送していた。

放送局全体の音楽番組の傾向をみると、ジャワ音楽、クロンチョン音楽、アラブ音楽、スダ音楽、中国音楽、ムラユ音楽が頻度の高いグループを形成している。この主要6音楽で全体の番組数の約50%、番組時間数で約60%をそれぞれ占める。東洋音楽の番組を含めるとこの割合は更に増加する。ただし、これらの主要6音楽は各放送局で平均的に放送されていたわけではなく、地域的な偏りがみられる。全放送局で平均的に多いのはジャワ音楽とクロンチョン音楽である。これはNIROMがジャワ島でのみ放送を行っていたことから考えれば自然な現象であるが、バタビアやスラバヤの大都市ではジャワ音楽は決して圧倒的に多いわけではなく、むしろクロンチョン音楽の頻度の方が高い(スラバヤでは時間数ではジャワ音楽が最も多い)。

主要6音楽以下は、ハワイ音楽、ガンバン・クロモンの順になる。ハワイ音楽は少なくとも1910年代終わりにはインドネシアに紹介され、1920年代には英領マラヤでも人気が高かった。例えば、1925年、バタビアのハワイアン楽団「Malay Hawaiian Troubadors (マレー・ハワイアン吟遊詩人)」は英領マラヤでも演奏活動を行っていた[Tan 1993: 76]。1930年代には「Hawaiian Syncopators (ハワイアン・シンコペーターズ)」と呼ばれる楽団が人気を集めたようであり[Pasaribu 1955: 63-67]、『NIROMの声』からもその存在が確認できる。ハワイ音楽はオランダ人の間でも人気が高く、彼らの要望に応える形でクロンチョン楽団のリーフ・ヤーファはハワイアン楽団「The Sweet Java Islander (甘美なジャワ島民)」を結成した[Esha 2005: 20]。なお、ハワイ音楽は1936年に上映され大ヒットしたアメリカ映画『*The Jungle Princess* (邦題: ジャングルの女王)』の中でも流れ、この映画の影響を受けて制作されたインドネシア初の大ヒット国産映画『月光 (*Toerang Boelan*)』におけるクロンチョン音楽の採用³³⁾に大きな影響を与えた。『NIROMの声』からもハワイアン楽団の活動がいくつか確認できる。³⁴⁾これらの楽団のメンバーがインドネシア人(プリブミ)であったかどうかは不明であるが、『NIROMの声』に掲載された写真(写真1)から判断すると、例えば、「Orkest South Sea Crooners (南海の感傷シンガー楽団)」のメンバーはプリブミであったと思われる。

ガンバン・クロモンはバタビア特有の音楽であることから、番組はバタビア放送局に集中し

33) この映画の大ヒットは、主演且つ歌手でもあったルキア(Miss Roekiah)の名を不動のものにした[Said 1991: 35-36]。なお、主題歌の「月光」はマレーシア国歌の旋律。

34) 例えば、Harry King & The Boys, Orkest South Sea Crooners, Queenie & David Kaili, Semarang Entertainer, The Aloha Tuners など。



写真1 Orkest South Sea Crooners
出所：[Anonymous 1953]

ている。

地方音楽は、ジャワ音楽、スンダ音楽、ムラユ音楽以外では4種類（バリ音楽、マナド音楽、アンボン音楽、ガンドゥルン）が確認できるが、頻度は数えるほどしかない。その他の音楽ではインド音楽が比較的頻度が高い程度で、日本音楽、西洋音楽、タイ音楽とも少ない。音楽番組時間数ではワヤン&クトプラッの時間数が多いのが顕著である。これは公演時間が長いワヤン等の演劇の性質から考えれば当然のことと言えよう。

(2) 放送局別傾向

全国／バンドン局は、バンドンがスンダ地方の中心地という地域性からスンダ音楽の頻度が高くなっている。一方、全国放送という使命も兼ねていたこともあり、クロンチョン音楽とジャワ音楽も同程度の頻度が確認できる。次いで、アラブ音楽、ムラユ音楽、中国音楽、ハワイ音楽と続く。

バタビア局はクロンチョン音楽が頻度・時間数とも多く、以下、アラブ音楽、スンダ音楽、ムラユ音楽、中国音楽、ジャワ音楽、ガンバン・クロモンがほぼ同程度の頻度で続く。他の放送局では音楽の傾向に地域性がみられるのに対し、バタビア局では主要6音楽がほぼ同程度の頻度で放送されている。「メスティソ文化」的特徴をもつバタビア社会の多様性が音楽文化の面からも確認できよう。³⁵⁾

ジョクジャカルタ局は東洋音楽とジャワ音楽の頻度が群を抜いて高いが、放送時間ではジャワ音楽が群を抜いて多い。

35) バタビアの1930年の人口構成は、欧州人6.9%、中国人14.8%、他のアジア人1.4%、インドネシア人76.9%で、スラバヤとスマランに較べて中国人の人口比が高かった [Indisch Verslag 1941: 13-16]。

ソロ局は主にクレネガン (klenengan)³⁶⁾ 等のジャワ宮廷音楽を王宮から生中継した。この放送は協力関係にあるジョクジャカルタ局とスマラン局にリレー中継された。

スマラン局の傾向はソロ局やジョクジャカルタ局の傾向とかなり異なる。ジャワ音楽が頻度、放送時間数とも群を抜いて多いのは同じであるが、放送された音楽ジャンルは9種類と、ジョクジャカルタ局の6種類と較べて多い。これは、スマランがバタビア、スラバヤに次ぐ第3の都市で、人口構成もジョクジャカルタよりも多様性に富み、³⁷⁾ それに応じた多様な音楽嗜好が背景にあったと考えられる。クロンチョン音楽の比率がバタビアやスラバヤと比較して低いが、これは、スマラン局がソロ局支部としてソロ局のジャワ音楽番組を中継放送していたことと関係があらう。また、ムラユ音楽の頻度が他の放送局と較べて際立って高いが、この背景は不明である。また、若干であるが日本の歌も放送されている。

スラバヤ局は、NIROMの中核放送局としてNIROMが直接番組制作を行っていたことから、番組内容について『NIROMの声』ではほぼ1ページを割いて詳細に紹介している。他の5局の紹介が纏めてほぼ1ページで紹介されているのとは対照的である。音楽番組の傾向は、東ジャワの中心都市であるにも拘わらずジャワ音楽よりもクロンチョン音楽の頻度の方が高い。³⁸⁾ 一方、中国音楽とアラブ音楽の頻度はバタビア局とバンドン局と同程度に高いが、スンダ音楽とムラユ音楽の頻度が極端に低いという興味深い傾向が読み取れる。スラバヤの人口構成³⁹⁾ はバタビアとそれほど変わらないが、音楽傾向から判断すると、バタビアほど複雑な混成社会ではなかったことが読み取れる。

(3) 音楽ジャンル別傾向

ここでは本稿で考察対象となる音楽、クロンチョン音楽とムラユ音楽、アラブ音楽を中心に音楽の傾向を詳しくみでみる。

〈クロンチョン音楽〉

番組の多くは、「レコードによるクロンチョン音楽とスタンブルの鑑賞 (Memperdengarkan Krontjong dan Stamboel dari Piringan Itam)」のタイトルで、ほとんどの場合、歌手名と曲名が明記されている。当時、ルンバ (rumba) が流行していたようで、「Krontjong Rumba」と

36) ガムランの編成に歌を入れたジャンルで、舞踊の伴奏などではなく、音楽演奏そのものを目的とする。スンダのクリニガン (Kliningan) に同じ [川口他 1992: 57]。

37) スマランの1930年の人口構成は、欧州人5.8%、中国人12.6%、他のアジア人1.0%、インドネシア人80.6%、一方、ジョクジャカルタのそれは、欧州人4.1%、中国人6.5%、他のアジア人0.12%、インドネシア人89.2%であった [Indisch Verslag 1941: 20]。

38) ただし、時間数では逆転している。

39) スラバヤの1930年の人口構成は、欧州人7.6%、中国人11.4%、他のアジア人1.6%、インドネシア人79.4% [Indisch Verslag 1941: 14]。

いう番組がいくつか確認できる。⁴⁰⁾ ルンバは1930年の「南京豆売り (El Manicero)」の大ヒットで世界に広がったキューバ音楽で、本来はソンと呼ばれていた音楽である。なお、クロンチョン楽団 (Krontjongorkest) などクロンチョンと明記されている番組は全てここに含めた。

クロンチョン音楽の曲名はインドネシア語表記がほとんどで、オランダ語⁴¹⁾ は若干みられる程度である。一方、楽団名は、スラバヤ局専属の De Nachtegaal (ナイチンゲール) やバンドン局の Jong Indonesische Moesik (JIM: 青年インドネシア音楽) ともオランダ語表記である。また、今回の分析の対象になっていないが、翌11月の号ではリーフ・ヤーファの存在も確認できる [Soeara NIROM 3(22) 1936b: 14]。歌手は、レオ・スペル (Leo Spell) (写真2) のようなユーラシアンもいたが、多くはインドネシア人 (プリブミ) である。⁴²⁾ 当時最も人気の高かった歌手はS.アブドゥラ⁴³⁾ とイェム (Miss Iem) で、番組で取り上げられた頻度が群を抜いて高い。S.アブドゥラは英領マラヤでも人気が高く、1938年にシンガポールでコンサートを行っている [Tan 1996/97: 15]。その他では、ユーリス (Miss Eulis)⁴⁴⁾ (写真3), モール (Miss Moor) (写真4), ヤコバ (Miss Jacoba) (写真5), リー (Miss Lee), ティウ (Miss Tieo), スカムト (Soekamto) らの登場頻度も高い。

〈ムラユ音楽〉

番組の多くは「ムラユの歌 (lagoe Melajoe)」というタイトルである。少数だが「ムラユ音楽の演奏 (permainan musik Melajoe)」や「シンガポールのムラユの歌 (lagoe Melajoe dari Singapura)」もあり、これらもムラユ音楽に含めた。番組には歌手名と曲名が明記されている場合も多く、それらから判断すると英領マラヤのバンサワン劇団で活躍していた歌手達の曲が圧倒的に多い。例えば、当時の人気バンサワンの一つである ディーンズ・グラランド・オペラ (Dean's Grand Opera) が演じたムラユ歴史劇エナンとハン・トゥア (Ma'Enang & Hung Tuah) の挿入歌や、同劇団のマイムーン (Miss Maimoon) やサルマー (Miss Salmah), 更



写真2 Leo Spell

出所: [Soeara NIROM 3(20) 1936a]

40) 実際の音楽については、現存するアニー・ランドウ (Miss Annie Landouw) の「Rumba Tawang Mango (ルンバ・タワン・マゴ)」の録音から確認することができる。

41) 例えば、「O Mijn Schat (おー、私のダーリン)」等。

42) 名前からの判断になるが、歌手60名の内訳は、インドネシア人 (プリブミ) 36名、中国人9名、ユーラシアン15名であった。

43) リーフ・ヤーファのメンバー。

44) リーフ・ヤーファのメンバーであったイスマイル・マルズキ (Ismail Marzuki: 後述) の妻。スンダ人とアラブ人の混血 [Esha 2005: 35]。



写真3 Miss Eulis
出所：[*Soeara NIROM* 9 (1) 1942a]



写真4 Miss Moor
出所：[*Soeara NIROM* 3 (22) 1936a]



写真5 Miss Jacoba
出所：[*Soeara NIROM* 9 (10) 1942f]



写真6 Siti Amsah
出所：[*Soeara NIROM* 3 (20) 1936a]

には有名なバンサワンの歌い手であったティヤー（Miss Tijah）らの曲が多く見られる [ibid.: 16–18]。インドネシア国内では、バンドンを拠点に活動を行っていたスマトラ楽団「古い剣（Orkest Soematra Tikam Toea）」や女性歌手シティ・アムサ（Siti Amsah）（写真6）や劇団ダルダネラ⁴⁵⁾のジャ（Miss Dja）の名前がいくつかみられる程度である。

〈アラブ音楽〉

番組の多くは「アラブの歌（lagoe Arab）」というタイトルであるが、「トルコの歌（lagoe Toerki）」や「ガンプス楽団（Gamboesorkest）」もアラブ音楽に含めた。なお、イスラーム教の礼拝時間を知らせるアザーンの前後15分間アラブ音楽が流れていたが、これは音楽番組でないため除外した。アラブ音楽の放送頻度が高かった理由の一つは、エジプト映画の影響と考えられる。蘭領東インドにおけるエジプト映画の輸入実績は第8位 [Indische Verslag 1941: 132] とそれほど多くなかったが、映画の挿入歌は流行歌としてラジオから流れていた。例えば、エジプトの伝説的女性歌手ウム・クルスーム（Om Kolsum）⁴⁶⁾が1936年に主演した処女映画『ウェダ（Wedad）』は蘭領東インドでも上映され、彼女が歌う挿入歌がラジオからも流れていたことが確認できる。また、ガンプス楽団（Gamboes Orkest）と呼ばれる国内のアラブ音楽を演奏する楽団の人気も高かったようである。ガンプスはアラブ音楽でワード（ud）にあたる楽器でマレー世界⁴⁷⁾において広くみられるが、インドネシアでは音楽ジャンル名を指すこともある。当時のガンプス楽団の中心地はスラバヤで、シェッ・アルバル（Syech Albar

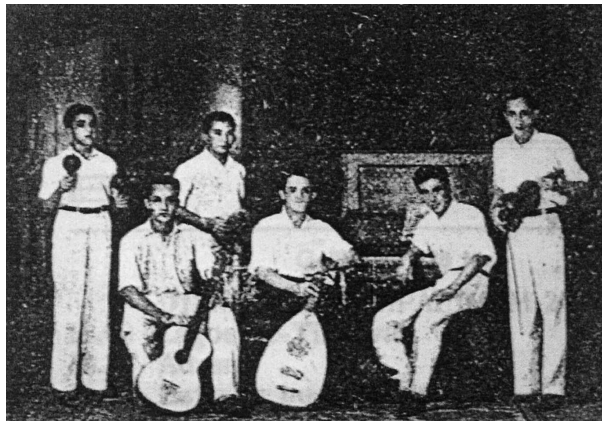


写真7 Syech Albar & Gamboes Orkest
出所：[Soeara NIROM 3 (22) 1936b]

45) ダルダネラについては猪俣 [1996: 42–47, 124–126] 参照。

46) 1904年生れ。1975年没。

47) ここでいうマレー世界とはマレー語を話すイスラーム教徒が居住する都市空間を指す。ガンプスについては、Hilarian [2004] 参照。

1908-47)⁴⁸⁾ 率いるガンブス楽団（写真7）がスラバヤ局で頻繁に生演奏を行っていた。東ジャワはアラブ系住民が国内で最も多い地域⁴⁹⁾で、その中心都市スラバヤはアラブ系住民が全人口の1.6%（中国人を除く他のアジア人を含む）を占めていた [*ibid.*: 21]。アルバルもスラバヤ出身のハドラマウト系アラブ人で、ガンブスの演奏者兼歌手として人気を集めていた。金曜日の礼拝の前にはラジオ局から必ず彼の歌が流れ、レコードは英領マラヤやアラブ世界にも広く流通したと言われている [*Republika* 2005]。このように、ハドラマウト出身者がインドネシア音楽文化の重要な一角を担っていたことがわかる。

〈ジャワ音楽〉

「ジャワの歌 (lagoe Djawa)」という番組を基本的にジャワ音楽としたが、クレネガン (Klenengan), ガムラン (Gamelan), ウヨン (Oejon-oejon), ルドウルック (Loedroek), グンディン (Gending-gending) もジャワ音楽に含めた。ジャワ音楽の番組の内容は多岐にわたっていることがわかる。

〈スンダ音楽〉

「スンダの歌 (lagoe Soenda)」という番組を基本的にスンダ音楽としたが、ガムラン・スンダ (Gamelan Soenda), ドウゲン (Degoeng), クチャピ楽団 (Ketjapi Orkest), クチャピとスリンによるスンダ・コンサート (Concert Soenda dengan Ketjapi dan soeling), クリニガン (Kliningan), チュレンプガン (Tjelempoengan) らもスンダ音楽に含めた。これらの中ではクチャピ⁵⁰⁾ 楽団の放送頻度が比較的高い。

〈中国音楽〉

「中国の歌 (lagoe Tiong Hwa)」という番組を中国音楽とした。この表記の後に「cinema (映画)」や「モダン (modern)」が付されている番組も散見されるが、「Tiong Hwa」があることから、これらの番組はすべて中国音楽に含めた。中国映画の輸入は1940年の統計では米国に次いで2位 (12.8%) で [*Indische Verslag* 1941: 132], これが映画挿入歌の頻度が高かった背景であろう。また、ヤン・チン (Yang Khiem Orkest) と呼ばれる楽団⁵¹⁾ (写真8) も中国音楽に含めた。ヤン・チン楽団はスラバヤとバタビアにいくつか存在していたことが確認できる。なお、「中国ガンバン・クロモン (Tiong Hwa Gambang Kromong)」という番組も確認できるが、「Tiong Hwa」が付加されていることから、これも中国音楽に含めている。

48) 本名, Syech bin Abdullah Albar. 1970年から80年代に活躍したロック・グループ「ゴッド・ブレス (God Bless)」のリードボーカル, アフマド・アルバル (Ahmad Albar) の実父。なお, アフマド・アルバルは, ダンドゥット女性歌手のカメリア・マリック (Camelia Malik) と異父兄妹。

49) 1930年統計で18,027人が居住 [*Indisch Verslaag* 1941: 45]。現在でもスラバヤにはアラブ系住民居住区カンブン・アンベル (Kampung Ampel) が存在する。

50) スンダの箏。

51) ヤン・チンは洋琴・揚琴の意味。

2. 1942年

表8は、1942年1月4～31日の番組頻度を放送局別に数量化し、表9～11は、1936年と同様のやり方で音楽番組とその他の番組の頻度比率、音楽番組時間数の数量化、音楽番組とその他の番組の時間数比率をそれぞれ算出した。以下、1936年と同様に全体的傾向、放送局別傾向、音楽ジャンル別傾向をそれぞれみていく。

(1) 全体的傾向

既述のとおり、1942年は東洋放送の放送権限がNIROMからPPRKに完全移譲され、ジャワ島に限定されていた放送局もスマトラにメダン局が開設されるなど、インドネシアのラジオ局の構図が大きく変化していた年である。一方、国際情勢は緊迫しており、オランダ本国は既にドイツ軍に占領（1940年）され、蘭領東インドにも日本軍の脅威が目前にまで迫っていた。⁵²⁾

1942年の番組全体に占める音楽番組の割合は、番組数が約43.7%、番組時間数で68.7%となっており、1936年と比較して、それぞれ27.6%及び15.1%減少している。この減少に伴い、その他番組とニュース番組の割合が増加し、番組数と時間数でその他の番組が18.3%と5.7%、ニュース番組が9.3%と9.4%それぞれ増加している。その他番組の内容を列記すると、宗教講話、地方紹介、海外紹介、健康相談、オランダ語講座、中国文化紹介、料理、詩の朗読、文学講話、戦争情報等であり、1936年と較べて番組が多様化していることがわかる。特に、ジャワ島以外の地方紹介番組が増加していることが注目される。ニュース番組はメダン局を除いて毎日2～6回（各15分程度）放送された。⁵³⁾

音楽番組の内訳は、主要6音楽の割合は番組数で23.5%、番組時間数で38.6%とそれぞれ大きく減少している。これは、放送された音楽が1936年と較べて多様化したことが背景にある。ただし、その他の音楽として区分された音楽の中には内容の不明な音楽や楽団が多く、今後その内容が判明すればこれらの比率は大きく変化する可能性がある。主要6音楽を1936年のそれと比較してみると、音楽傾向に地域的な偏りが引き続きみられるが、メダン放送局を除いて中国音楽の増加が著しく、全体の頻度では最も高い音楽となっている。⁵⁴⁾ またアラブ音楽も頻度、時間数とも増加が顕著である。一方、クロンチョン音楽の頻度が相対的に低下している。

52) 『NIROMの声』でも戦争状態にあるため番組が予定通り行われない場合がある旨明記している [Soeara NIROM 9 (2) 1942b: 2]。

53) 東インド政庁は対日戦争開戦を受け、毎晩19:30のニュースで極めて重要なスピーチを放送し、その後、最新戦争情報について解説するという番組編成をとった [Soeara NIROM 9 (1) 1942a: 2]。

54) 中国音楽の急増の背景は不明であるが、『東洋の声』には中国文化の紹介を推進すべしとの論説が掲載されている [Soeara Timoer 1 (1): 5]。インドネシアのラジオ受信機所有者の4割が華人系住民であり、彼らがPPRKに財政支援を行っていた可能性、あるいは、華人系住民の中国ナショナリズムの高揚の可能性等が指摘できよう。また、春節前という特殊状況も関係していた可能性がある。なお、中国音楽は放送時間数ではジャワ音楽やクロンチョン音楽より少ない。

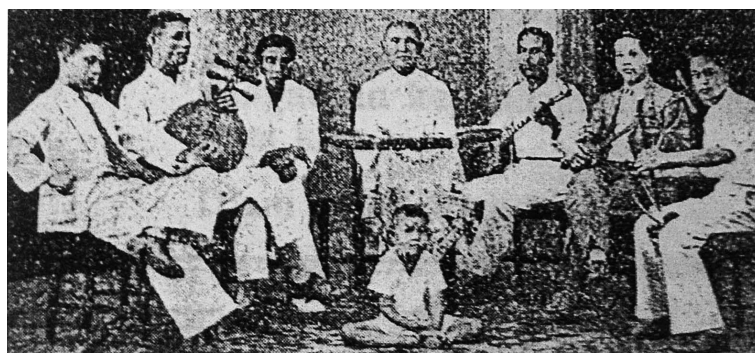


写真8 Yang Khiem Orkest

出所：[*Soeara NIROM* 3 (20) 1936a]

表8 放送局別音楽番組数（1942.1.4～31）

（単位：本）

	全国	西ジャワ	中・東ジャワ	メダン	合計
クロンチョン音楽 (Krontjong)	17	21	32	25	95
スンダ音楽 (Soenda)	13	34	9	10	66
ジャワ音楽 (Djawa)	11	21	50	10	92
ムラユ音楽 (Melajoe)	17	7	9	32	65
中国音楽 (Tiong Hwa)	33	32	43	11	119
アラブ音楽 (Arab & Gamboes)	17	18	31	22	88
ハルモニウム (Harmonium)	8	6	9	3	26
バリ音楽 (Bali)	6	2	4	0	12
アンボン音楽 (Ambon)	6	2	7	4	19
マナド音楽 (Menado)	3	2	1	0	6
バタック音楽 (Batak)	12	8	6	11	37
アチェ音楽 (Atjeh)	2	0	0	4	6
ガンドゥルン (Gandroeng)	0	0	1	0	1
ガンバン・クロモン (Gambang Kromong)	9	5	6	4	24
ミナンカバウ音楽 (Minangkabau)	8	5	14	6	33
ブンクル音楽 (Bengkoeloe)	1	0	0	0	1
ハワイ音楽 (Hawaiian)	12	7	15	17	51
インド音楽 (Hindoestan)	0	0	4	5	9
ワヤン&クトブラッ (Wayang & Ketoprak)	6	6	7	3	22
バンサワン/トニール (Bangsawan/Tonil)	3	3	4	3	13
教会音楽 (Geredja)	2	2	2	2	8
その他 (不明)	49	51	66	17	183
音楽番組計	235	232	320	189	976
その他番組	193	296	247	132	868
ニュース (Berita)	81	162	140	6	389
合計	509	690	707	327	2,233

出所：Soeara NIROM より筆者作成。

表9 放送局別音楽番組数の比率 (1942.1.4～1.31)

(単位：%)

	全国	西ジャワ	中・東ジャワ	メダン	全体の比率
主要6音楽	21.2	19.3	24.6	33.6	23.5
その他音楽	25.0	14.3	20.7	24.2	20.2
音楽番組計	46.2	33.6	45.3	57.8	43.7
その他番組	37.9	42.9	34.9	40.4	38.9
ニュース	15.9	23.5	19.8	1.8	17.4
合計	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0

出所：Soeara NIROM より筆者作成。

表10 放送局別音楽番組時間数 (1942.1.4～31)

(単位：分)

	全国	西ジャワ	中・東ジャワ	メダン	合計
クロンチョン音楽 (Krontjong)	969	751	1,559	866	4,145
スندا音楽 (Soenda)	414	3,141	282	254	4,091
ジャワ音楽 (Djawa)	566	1,975	4,244	223	7,008
ムラユ音楽 (Melajoe)	954	184	217	876	2,231
中国音楽 (Tiong Hwa)	1,115	921	1,395	470	3,901
アラブ音楽 (Arab & Gamboes)	843	693	922	578	3,036
ハルモニウム (Harmonium)	551	286	458	54	1,349
バリ音楽 (Bali)	86	20	80	0	186
アンボン音楽 (Ambon)	115	30	191	60	396
マナド音楽 (Menado)	75	60	30	0	165
バタック音楽 (Batak)	412	315	174	353	1,254
アチェ音楽 (Atjeh)	45	0	0	73	118
ガンドウルン (Gandroeng)	0	0	30	0	30
ガンバン・クロモン (Gambang Kromong)	352	441	129	39	961
ミナンカバウ音楽 (Minangkabau)	458	278	376	184	1,296
ブンクル音楽 (Bengkoeloe)	75	0	0	0	75
ハワイ音楽 (Hawaiian)	473	211	499	517	1,700
インド音楽 (Hindoestan)	0	7	102	98	207
ワヤン&クトプラッ (Wayang & Ketoprak)	826	1,945	1,692	50	4,513
バンサワン/トニール (Bangsawan/Tonil)	180	151	162	125	618
教会音楽 (Geredja)	30	30	20	8	88
その他 (不明)	1,146	2,262	2,123	554	6,085
音楽番組計	9,685	13,701	14,685	5,382	43,453
その他番組	3,455	4,203	3,214	1,318	12,190
ニュース (Berita)	1,635	3,141	2,801	20	7,597
合計	14,775	21,045	20,700	6,720	63,240

出所：Soeara NIROM より筆者作成。

表11 放送局別音楽番組時間数の比率 (1942.1.4～31)

(単位：%)

	全国	西ジャワ	中・東ジャワ	メダン	全体の比率
主要6音楽	32.9	36.4	41.6	48.6	38.6
その他音楽	32.6	28.7	29.3	31.5	30.1
音楽番組計	65.5	65.1	70.9	80.1	68.7
その他番組	23.4	20.0	15.5	19.6	19.3
ニュース	11.1	14.9	13.5	0.3	12.0
合計	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0

出所：Soeara NIROM より筆者作成。

放送された音楽ジャンルの数は20種類（不明を含む）で、1936年の18種類（東洋音楽を除く）と較べてそれ程変化はない。他方、地方音楽が8種類から12種類に増加しており、なかでも、バタック音楽やアチェ音楽、ミナンカバウ音楽など、1936年の放送では存在しなかったスマトラ地方の音楽番組が流れていたことは興味深い。これはメダン局開局の影響もあると考えられるが、表8が示すように、ミナンカバウ音楽やバタック音楽はジャワでも放送されており、全国的な傾向であったことがわかる。アンボン音楽やマナド音楽も1936年と較べて明らかに放送頻度が増加している。

また、1942年の番組の注目点として、1936年の放送には存在しなかった新しい音楽ジャンル、ハルモニウム音楽の存在が指摘できる。この音楽は全ての放送局で確認できる。ハルモニウム (harmonium) とはフリーリードを足踏み（手動）ふいご、または送風機を用いて鳴らすリードオルガン属の楽器で、マレー社会には19世紀後半にインドからもたらされた。バンサワンの中で頻繁に用いられたこともあり、ムラユ音楽にとって不可欠の楽器として理解されている。ガンブス楽団同様、その音楽で中心的な役割を果たす楽器の名前がそのまま音楽ジャンル名になった例の一つである（後述）。

(2) 放送局別傾向

全国（バタビア）局は主要6音楽の頻度がその他の音楽よりも低くなっており、多様な音楽が平均的に放送されていた傾向が読み取れる。その中で中国音楽の頻度が群を抜いて高い。また、ムラユ音楽とアラブ音楽の増加も顕著である。一方、クロンチョン音楽とジャワ音楽、スンダ音楽の頻度は相対的に低下している。地方音楽は8種類確認でき、その中ではバタック音楽とガンバン・クロモン、ミナンカバウ音楽の頻度が比較的高い。

西ジャワ局は、音楽番組の比率が他の放送局と較べて最も低く、全体の3割程度である。主要6音楽の頻度は他の音楽と較べて若干高いが、全番組に占める割合は2割を下回っている。主要6音楽の中ではスンダ音楽と中国音楽の頻度が最も高く、番組時間数ではスンダ音楽が群を抜いて多い。クロンチョン音楽とムラユ音楽が頻度・時間数とも減少傾向にあり、逆にアラ

ブ音楽が頻度、時間数とも増加している。

中・東ジャワ局は、主要6音楽の比率が他の音楽よりも高いが、それでも25%を下回っている。主要6音楽の中ではジャワ音楽と中国音楽の頻度が最も高く、番組時間数ではジャワ音楽が群を抜いて高い。一方、ここでもクロンチョン音楽が頻度・時間数とも減少傾向にあることが確認できる。ムラユ音楽は頻度・時間数もそれ程高くないが、アラブ音楽の頻度が他の放送局と較べて高い。地方音楽は7種類で、頻度が高い順にミナンカバウ音楽、アンボン音楽、バタック音楽と続く。1936年には全く放送されていなかったガンバン・クロモンがバタック音楽と同頻度で放送されていたことは興味深い。

メダン放送局は他の局と較べて音楽番組の比率が高く、6割弱を維持している。主要6音楽の比率も3割を超えており、その他の音楽よりも1割近く高い。音楽番組の傾向には他局同様、地域性がみられ、ムラユ音楽が頻度・時間数とも最も高い。以下主要6音楽は、クロンチョン音楽とアラブ音楽と続くが、時間数ではクロンチョン音楽がムラユ音楽とほぼ同程度のレベルにあることが確認できる。中国音楽、スンダ音楽、ジャワ音楽の頻度はそれ程高くなく、むしろハワイ音楽とバタック音楽の方が、頻度・時間数とも高い。地方音楽は5種類確認でき、アンボン音楽とガンバン・クロモン以外はいずれもスマトラ地方の音楽である。インド音楽が他局と較べて多いが、これはインド系住民が比較的多いメダンの特徴が背景にあらう。⁵⁵⁾

(3) 音楽ジャンル別傾向

ここでは1936年同様、本稿のテーマであるクロンチョン音楽とムラユ音楽、アラブ音楽を中心に音楽の傾向をみしてみる。ジャワ音楽とスンダ音楽の傾向及び内容は1936年とほとんど同じであるため割愛する。なお、1942年は1936年と較べて放送時間が全体的に拡大したこともあり、番組紹介のスペースが大幅に減少している。そのため、番組表からは歌手名と楽団名は確認できるが、曲名については1936年と較べてほとんど情報が無い。

〈クロンチョン音楽〉

クロンチョン音楽の番組には、「Krontjong asli dan modern/baru (オリジナル・クロンチョンとモダン／新しいクロンチョン)」の他、「ミス・ルキアの声 (Soeara Miss Roekiah)」のように有名歌手の名前を冠した番組が多い。楽団は、1936年に引き続き、リーフ・ヤーファの活動が確認できる他、イスマイル・マルズキ (Ismail Marzuki)⁵⁶⁾ が率いるバンドン局専属ラ

55) 統計が若干古いが、1900年のメダンを含むスマトラ東沿岸州のインド人人口は3,270人（中国人58,516人、ジャワ人25,224人）であった [Reid 2005: 222-223]。

56) 1914年ジャカルタ生れ。1958年没。著名なクロンチョン音楽作詞作曲家で、「Gugur Bunga (花は散って)」や「Halo Halo Bandung (ハロー・ハロー・バンドン)」などの名曲を残した。2004年、インドネシア国家英雄に認定。

ジオ楽団 (Radio-Orkest) や、スカルノ (Soekarno) 率いるスラバヤ局専属ラジオ楽団など少なくとも10楽団以上確認できる。歌手では、ルキア (Miss Roekiah) (写真9), ネティ (Miss Netty) (写真10), ヤコバ, モール, S. アブドゥラ, タン・チェン・ボック (Tan Tjeng Bok) らの名前が頻繁に登場するが、ネティを除いて1936年と同じ顔触れである。新しいスタイルの流行や有力新人歌手の存在は確認できない。

〈ムラユ音楽〉

「ムラユの歌 (lagoe Melajoe)」の他, 「ムラユ・セレクション (Boenga Rampai Melajoe)」 「オリジナル／モダンムラユの歌 (lagoe Melajoe asli/modern)」らをムラユ音楽に含めた。英領マラヤで活躍するバンサワンの専属歌手が圧倒的に多かった1936年の傾向とは対照的に, 1942年は国内の楽団の活躍が著しい。パチャラン・ムダ (Patjaran Moeda: 若い恋人) やスガイ・ムシ (Soengai Moesi: ムシ河) 等, ムラユ音楽を演奏する新しい楽団がバタビアをはじめ各地で結成された様子が看取できる。シナル・メダン (Sinar Medan: メダンの光) という楽団の存在が確認できるが, これは1950年初めに活躍した同名の楽団⁵⁷⁾とは別の楽団である。なお, 1950年代以降頻繁に使われる「オルケス・ムラユ (orkes melayu: ムラユ楽団)」の用語はここではまだ確認できない。



写真9 Miss Roekiah

出所: [Soeara NIROM 9 (2) 1942b]



写真10 Miss Netty

出所: [Soeara NIROM 9 (2) 1942b]

57) シナル・メダンはウマル・ファウジ・アセラン (Umar Fauzi Aseran) が1948年に結成した楽団で, 専属歌手にはハリス (A. Harris) やエマ・ガンガ (Emma Gangga) 等がいた [田子内 1998: 359]。

〈アラブ音楽〉

「アラブの歌 (lagoe Arab)」の他, 「ガンプスの歌 (lagoe Gamboes)」 「砂漠の歌 (lagoe dari padang pasir)」 「エジプトの歌 (lagoe Mesir)」 「カシダーの歌 (lagoe Kasidah)」 「ウム・クルスームの声 (soeara Oum Kalsoum)」 「ガンプス・ムラユ (Gamboes Melajoe)」 「シェッ・アルバルの声 (soeara Sech Albar)」 等をアラブ音楽に含めた。1936年同様, エジプトの女性歌手ウム・カルスームとスラバヤ出身のシェッ・アルバルの人气が高く, この両者で番組の半数以上を占めている。これら以外にも, バタビアやスマラン, 西ジャワのガルット, メダンでも新しいガンプス楽団が結成され活動を行っていたことが確認できる。1950年代初めに活躍したシナル・メダンの前身であるアル・ワルダ (al Wardah) や, 1950年代を代表するムラユ楽団ブキット・シグンタン (Orkes Melayu Bukit Siguntang) を率いたアブドゥル・ハリク (Abdul Halik) が所属していたガンプス楽団プムダ・プタウィ (Pemoeda Betawi: バタビア青年) の存在も確認できる [田子内 1998: 361]。

〈中国音楽〉

「中国映画の歌 (lagoe Cinema Tionghoa)」 「上海の歌 (lagoe Sjanghai)」 「北京の歌 (lagoe Peiping)」 「広東の歌 (lagoe Canton)」 「中国語の歌 (lagoe Mandarijn)」 「ヤン・チン音楽 (musik Yang Khiem)」 らを中国音楽に含めた。1936年と比較して中国本土の音楽番組が多くなっていることが確認できる。また, ハワイアン音楽と中国音楽のフュージョンであるモダン中国音楽 (lagoe Tionghoa modern)⁵⁸⁾ の活動も確認できる。なお, 中国を示すインドネシア語表記がTiong Hwa からTionghoaに変化したことは興味深い。

IV ハルモニウム音楽

本章では, 1942年の『NIROM の声』で確認できる新しい音楽, ハルモニウム音楽 (lagoe/musik harumonium, あるいは konsert harmonium) について考察する。この音楽, あるいはこの音楽を演奏したハルモニウム楽団 (perkoempoelan musik harmonium) に注目する理由は, ハルモニウム楽団が, ダンドウットの前身である1950年代前半のムラユ音楽を演奏した楽団, オルケス・ムラユの原型と言われているからである [田子内 1997: 138]。ハルモニウム音楽は1930年代末から1942年頃までの限定された期間⁵⁹⁾ に存在した音楽で, その後は確認されていない。それでは, このハルモニウム音楽とはどのような音楽であったのだろうか

58) 例えば, The Chinese Hawaiian Srenadersなどの楽団。

59) 1936年11月19日にバタビア局で1件確認 (Harmoniumorkest) できるが, 1940年以降のハルモニウム音楽と同じであるか不明。

か。⁶⁰⁾ バタビアでは1939年に「モダン・ガンプス&ハルモニウム混合楽団 (Modern Gamboes & Harmonium Orkest Combinatie)」と呼ばれる楽団が活動しており、イスマイル・マルズキがリーダーを務めていた [Esha 2005: 47]。この楽団名が示唆するように、ハルモニウム音楽とガンプス音楽の間には何らかの関係があったようである。

1930年代後半と思われるハルモニウム音楽の録音⁶¹⁾を聞いてみると、リズム構造もメロディ・パターンも基本はアラブ (ガンプス) 音楽である。しかし演奏にはガンプスが使用されておらず、代わりにハルモニウムの音が前面で強調されている。これが通常のガンプス音楽と異なるユニークな点である。既に述べたように、ハルモニウムは19世紀後半にインドからマレー社会にもたらされたが、元々は19世紀にヨーロッパで発達したリード・オルガン属の楽器で、19世紀中頃キリスト教宣教師によってインドに伝わった経緯がある。このハルモニウムはムラユ音楽にとって不可欠の楽器であることから、ガンプス音楽とムラユ音楽の間に音楽的相互作用が起こっていたと考えて間違いないであろう。もともと楽器ガンプスもムラユ音楽と密接な関係にある。例えば、マレー世界で広くみられる舞踊スタイル、ザピン (zapin)⁶²⁾ のアンサンブルではガンプスは不可欠の楽器である [Hilarian 2004: 12]。ザピンはアラブ起源の楽器ガンプスを使用することで、マレー社会とイスラーム文化を結びつける重要な芸能と考えられている。

それでは、どちらの演奏楽団が積極的に一方の音楽要素を吸収したのであろうか。1942年初めに比較的頻繁に活動が確認されているハルモニウム楽団、ペンヒブル・ハティ (Penghiboer Hati: 心の慰め) (写真11) は、興味深いことに、1940年にはムラユ音楽を演奏する楽団として紹介されている [Soeara Timoer 1 (1): 30]。この事実から判断すると、ムラユ音楽の演奏家達がガンプス音楽の影響を受けたようにみえる。しかし一方で、アル・ワルダーなどのガンプス楽団もハルモニウム音楽を演奏していたことが確認されており [ibid.: 28]、ガンプス楽団自身も楽器ハルモニウムを積極的に取り入れていた様子が窺える。

実際には、ハルモニウム音楽はガンプス音楽の一部ではなく、あくまでムラユ音楽の一部として認識されていたようである。おそらく1940年初めと思われる当時の写真からハルモニウム楽団の編成を確認すると、基本編成はハルモニウム、ビオラ、マラカス、グンダン、コントラバス、ギター、サクソ (写真12) で、ムラユ音楽の基本楽器であるハルモニウムとグン

60) 筆者は以前、ハルモニウム楽団はバタビアのマレー大衆演劇サムラー (Samrah) から派生した可能性があると示唆した [田子内 1997: 150-152]。しかし、ハルモニウム楽団が実際に演奏した音楽から判断すると、サムラーからハルモニウム楽団が派生したとは考えにくい (サムラーで演奏された音楽はムラユ音楽であった)。

61) 「Jaman (時代)」及び「Aden (アデン)」。

62) ザピンについてはNor [1993] を参照。

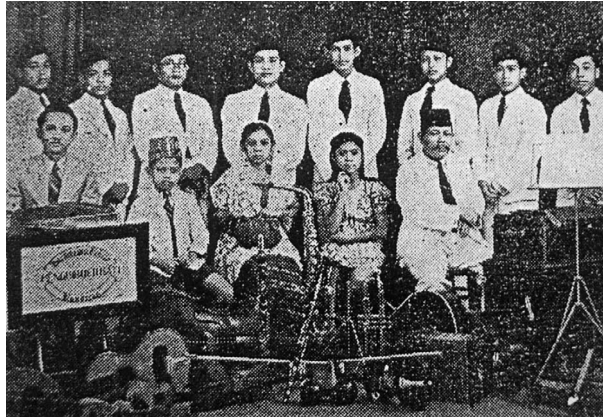


写真11 Perk. moesik harmonium “Penghiboer Hati”
出所：[Soeara NIROM 9 (1) 1942a]



写真12 Orkes Harmonium di Bandung
出所：[Anonymous 1953]

ダンを維持しつつも、その他の楽器は全て西洋音楽の楽器を使用している。ガンプスは使用しておらず、楽器編成だけからみると、バンサワンの演奏楽団に近い。メンバーの服装も伝統衣装ではなく西洋風の衣装である。写真下部の説明欄にも、「ムラユ音楽を演奏」と書いてある。また、ブンヒブル・ハティにかつて所属していたメンバーも同様の趣旨のことを話している。⁶³⁾

これらを総合すると、ハルモニウム音楽は1930年代後半以降のガンプス音楽流行の中で生まれた音楽と言えよう。つまり、ムラユ音楽を演奏していた楽団が、そのスタイルを維持しな

63) 1993年8月31日、フスイン・バワフィ（Husein Bawafie）氏へのインタビューより。

がら流行のガンプス音楽を演奏したのがハルモニウム音楽と言えるのではないか。⁶⁴⁾ おそらく、従来のムラユ音楽と区別し新しいスタイルのムラユ音楽であることを強調するために、シンボリックな楽器名を借用してハルモニウム音楽と呼んだのであろう。そして、ムラユ音楽とガンプス音楽の関係は決してどちらかの一方通行の関係ではなく、双方向の関係であったと考えられる。

ハルモニウム音楽を生んだ当時の音楽文化は、直接的にはムラユ音楽とガンプス音楽の親和性を明らかにしているが、それと同時に、インドネシアのポピュラー音楽の担い手達の柔軟な姿勢が歴史的に培われたものであることを間接的に示している。1950年代以降、ピー・ラムリー（P. Ramlee）が主演するマレー大衆映画が大流行すると、ハルモニウム楽団の演奏家達はこの映画音楽を積極的に取り入れ、ガンプス音楽の演奏をほとんど止めてしまう。楽器ハルモニウムも使用されなくなり、楽団名もオルケス・ムラユに変えてしまうのである。このような一連の流れを改めて確認してみると、ハルモニウム楽団が1950年代のオルケス・ムラユの前身と言ってほぼ間違いないであろう。

ムラユ音楽が流行の音楽を取り入れるという姿勢はここで終わらない。1950年代末以降、マレー大衆映画に代わってインド大衆娯楽映画音楽が流行すると、その挿入歌のメロディとリズムをオルケス・ムラユの演奏家達は取り入れ始める。楽器編成も含め音楽的に変化し続けたムラユ音楽は1970年代前半に至ってダンドゥットという新しい呼称を得る。そして1990年代以降、カセットテープやテレビという大衆メディアを媒介にインドネシアを代表するポピュラー音楽の座を獲得していく。⁶⁵⁾ ダンドゥットに至るムラユ音楽の変遷、そしてそれを可能にした演奏家達の柔軟な姿勢に対する理解は、ハルモニウム音楽を生んだ1930年代末以降の音楽文化を認識することによって更に深まるのである。

V むすびにかえて

本稿では1936年及び1942年の『NIROM の声』の音楽番組を分析し、当時の音楽文化の状況を放送局別に描き出そうと試みた。しかし、取り上げた音楽番組は、1934年から約9年間続いたNIROMの放送からすればごく一部であり、この分析によって当時の音楽文化の全体像が明らかになったわけではない。また、音楽の商業主義化が進む中で音楽レコード会社が自社制作のレコードをラジオから流すために音楽番組の編成に対して如何なる合法的・非合法的手段

64) この推察は、Yampolsky の指摘とも一致する（1999年2月22日、名古屋での意見交換より）。

65) オルケス・ムラユ時代からダンドゥットに至る過程については田子内〔2001〕参照。

を講じていたのか、あるいは東インド政府が音楽番組編成に対してどこまで影響力を行使していたのか等、音楽文化を考察するためには明らかにしなければいけない疑問点がいくつか残されている。更に、理想的には当時を生きた音楽家の回想録や他の史料を使って、当時の音楽文化をより立体的に描く必要があるが、本稿では限定的な使用に留まった。このような課題を承知の上で、これまでの分析から当時の音楽文化に対して少なくとも以下の特徴が導き出せよう。

(1) レコード、映画、ラジオという新しいメディアを背景に生れた多彩な音楽文化の存在、(2) 地域性が強い音楽傾向、(3) 1930年代後半のクロンチョン音楽の人気、(4) 1940年初頭にはクロンチョン音楽の頻度が相対的に低下、それに代わってムラユ音楽とアラブ音楽、中国音楽の頻度が上昇、(5) ハルモニウム音楽の登場。

1930年代及び40年代のラジオからは実に多彩な音楽が流れていた。様々な地方音楽やクロンチョン音楽の他に、世界的に流行していたハワイ音楽やエジプト音楽が流れていた事実は、インドネシアの音楽文化がコスモポリタンの多様性に富んでいたことを物語っている。外部音楽の流入はインドネシア音楽に様々な刺激を与えた。例えば、ハワイ音楽の流行は、クロンチョン音楽にクロンチョン・ギターに代わってウクレレの導入を促し [Kornhauser 1978: 134]、ルンバの流行はピッチカート・チェロの導入やクロンチョン・ルンバという新しいスタイルを生み出した [Pasaribu 1955: 55]。また、ウム・カルスームやアブドゥル・ワハブ (Abdul Wahab) に代表されるエジプト音楽はアラブ系住民の音楽活動を刺激し、ガンブス楽団の発展に大きな影響を与えた [Koike 2002: 26]。

各ラジオ局が放送した音楽の傾向は、エスニック・グループの構成等、各地域の社会状況を反映していた。そのなかで、地域の壁を越えて全国的に人気の高かった音楽がクロンチョン音楽である。クロンチョン音楽は必ずしも突出した人気を得ていたとは言えないが、土屋の「社会にあまねくみちるようになっていった」というクロンチョン音楽に対する評価はある程度事実を反映していたと言えよう。1920年代のクロンチョン音楽の担い手はユーラシアンが中心であったが、1930年代後半以降はマレー系住民に中心が移り、アブドゥラヤルキア、リブットらの伝説的な歌手を生み出した。土屋が述べるところのクロンチョン音楽の「民族化」が確かに起こったのである。ところが、1940年代以降になるとクロンチョン音楽の放送頻度が相対的に低下していく。ルンバやハワイ音楽などの外国音楽から刺激を受けながらもポピュラー音楽として自ら進化したクロンチョン音楽の勢いは、少なくとも1940年代以降の『NIROMの声』からは確認できない。その理由については今後、更なる研究が必要と思われるが、この傾向は1950年代になっても続き、クロンチョン音楽は固定化、制度化の方向に向かうのである [田子内 1998: 361]。

クロンチョン音楽に代わり放送頻度が相対的に増加した音楽が中国音楽とムラユ音楽、アラブ音楽である。1942年の全国放送におけるムラユ音楽の頻度はクロンチョンと同数で、ハル

モニウム音楽を加えると中国音楽に次ぐ多さである。1950年代前半以降、ムラユ音楽の人気はクロンチョン音楽を凌駕するようになるが、その傾向は1940年代初めに既に始まっていた。つまり、インドネシアの文化統合を「草の根」のレベルで進めたのはクロンチョン音楽だけではなかったのである。

1930年代後半から40年代初めという時代はインドネシアにおける近代化の方向性を巡って「文化論争」⁶⁶⁾が展開された時期でもある。「文化論争」では、アリシャバナラの「西欧近代文化」志向派とサヌシ・パネやデワントロの「土着文化」志向派が活発な議論を繰り広げたが、その議論の土台となる当時のインドネシアの文化状況については、実のところこれまで具体的な議論が行われてきたわけではない。『NIROMの声』が示すように、当時のインドネシア音楽文化は世界の様々な音楽とインドネシア音楽が混在する状況にあり、インドネシア音楽の担い手達は外部音楽の影響を受けながら自らの音楽を進化させていった。それを可能にしたのが、レコードの流通とラジオの普及という大衆メディアの浸透であった。このように、少なくとも音楽文化においては「文化論争」に対する答えは既に出ていたのである。

ラジオを通じた音楽文化の発達の意義は国民文化形成に対する議論だけに留まらない。ラジオ放送は生まれようとしているインドネシアという国民国家の形成に対しても重要な役割を果たしたと思われる。つまり、ジャワ島から遠く離れたスラウェシ島のリスナーがジャワ音楽を聴き、ジャワ島のリスナーがアチェ音楽を聴くという行為は、国民国家形成に対してどのような役割を果たしたのであろうか。当時の一般住民の低い識字率⁶⁷⁾に鑑みれば、新聞や雑誌などの活字メディアよりも、誰でも聞くことのできる音楽の方が「われわれ」という共同体意識の形成にとってより効果的なメディアであったのではないか。⁶⁸⁾この問題意識に答えることは本稿の直接の課題ではないが、ラジオ放送が描く音楽文化はこのように様々なインプリケーションを我々に与えてくれるのである。

謝 辞

本稿を執筆するにあたり、貴重な音源を提供していただいた吉岡修氏に感謝の意を表します。

66) 文化論争については山本春樹 [1981] を参照。

67) 例えば、1930年のインドネシア人の識字率は、西ジャワで男性15%、女性3%で、スラウェシで男性17%、女性7%であった [Cribb 2000: 41]。

68) アンダーソンはナショナリズムにおけるラジオの役割に注目しているが、ラジオの役割はこれまで不当に過小評価されており、十分な研究がな行われていないと指摘している [アンダーソン 1987: 114]。

参考文献

- アンダーソン, ベネディクト. 1987.『想像の共同体——ナショナリズムの起源と流行』白石隆; 白石さや (訳). 東京: リブレポート. (原著 Anderson, Benedict. *Imagined Communities, Reflections on the Origin and Spread of Nationalism*. 1983. Verso Editions, and NLB.)
- Anonymous. 1953. *Sedjarah radio di Indonesia*. Djakarta: Djawatan Radio Republik Indonesia, Kementerian Penerangan.
- Cribb, Robert. 2000. *Historical Atlas of Indonesia*. London: Curzon Press and New Asian Library.
- Dick, Howard W. 2003. *Surabaya, City of Work: A Socioeconomic History, 1900–2000*. Singapore: Singapore University Press.
- Ensiklopedi Nasional Indonesia*. 1989. Jakarta: PT Cipta Adi Pustaka.
- Esha, Teguh, ed. 2005. *Ismail Marzuki: Musik, tanah air, dan cinta*. Jakarta: Pustaka LP3ES Indonesia.
- Gronow, Pekka. 1981. The Record Industry Comes to the Orient. *Ethnomusicology: Journal of the Society for Ethnomusicology* 25(2): 251–285.
- . 1983. The Record Industry: The Growth of a Mass Medium. *Popular Music* 3: 53–75.
- Hilarian, Larry. 2004. The Gambus(lutes) of the Malay World: Its Origins and Significance in Zapin Music. <http://portal.unesco.org/culture/en/ev.php>.
- Indisch Verslag* 1941. II. Statistisch Jaaroverzicht Van Nederlandsch-Indie over Het Jaar 1940. Batavia.
- 猪俣良樹. 1996.『日本占領下・インドネシア旅芸人の記録』東京: めこん.
- 石井米雄 (監修). 1991.『インドネシアの事典』東京: 同朋舎.
- Joshi, G.N. 1988. A Concise History of the Phonograph Industry in India. *Popular Music* 7(2): 147–156.
- 川口明子; 小池 誠; 福岡正太: 福岡まどか. 1992.『インドネシアのポピュラー音楽——バンドウン・ジャカルタ・東京』JASPM ワーキング・ペーパー・シリーズ No.5.
- 風間純子. 1992.「大衆文化」『入門東南アジア研究』東京: めこん
- Koike, Makoto. 2002. Bollywood versus Hollywood in the Globalization of Media: A History of Indian Films in Indonesia.『桃山学院大学総合研究所紀要』28 (1): 23–34.
- Kornhauser, Bronia. 1978. In Defence of Kroncong. In *Studies in Indonesian Music*, edited by Margaret Kartomi, pp.104–183. Centre for Southeast Asian Studies, Monash University.
- Kunst, Jaap. 1973. *Music in Java: Its History, Its Theory and Its Technique*. 2 vols. The Hague: Martinus Nijhoff.
- Lent, John A., ed. 1978. *Broadcasting in Asia and the Pacific: A Continental Survey of Radio and Television*. Philadelphia: Temple University Press.
- Lindsay, Jennifer. 1997. Making Waves: Private Radio and Local Identities in Indonesia. *Indonesia* 64: 105–123.
- McDaniel, Drew O. 1994. *Broadcasting in the Malay World-Radio, Television, and Video in Brunei, Indonesia, Malaysia and Singapore*. New Jersey: Ablex Publishing Company.
- Mrazek, Rudolf. 1997. Let Us Become Radio Mechanics: Technology and National Identity in Late-Colonial Netherlands East Indies. *Comparative Studies in Society and History* 39: 3–33.
- 中村とうよう (編). 1990.『クロンチオン入門』オーディオブック AB06. 東京: オーディオブック.
- Nor, Mohd Anis Md. 1993. *Zapin: Folk Dance of the Malay World*. Singapore: Oxford University Press.
- Pasaribu, Amir. 1955. *Musik dan Sekitarnya Wilajahnja*. Jakarta: Perpustakaan Perguruan KEM.P.P. dan K. PENSI. 1983. *Perjalanan Musik Indonesia*. Jakarta: Lithopica Jakarta.
- Reid, Anthony. 2005. *An Indonesian Frontier-Acehnese and Other Histories of Sumatra*. Singapore University Press.
- . 2006. Understanding Melayu (Malay) as a Source of Diverse Modern Identities. In *Contesting Malayness, Malay Identity Across Boundaries*, pp.1–24. Singapore University Press.
- Said, Salim. 1991. *Profil Dunia Film Indonesia*. Jakarta: Pustakakarya Grafikatama.
- 佐藤卓巳. 2001.『現代メディア史』東京: 岩波書店.
- Sen, Krishna; and Hill, David T. 2000. *Media, Culture and Politics in Indonesia*. South Melbourne: Oxford University Press.
- Shahab, Alwi. 2002a. Gaung Pan Islam di Pekojan. *Republika* 25 Agustus.
- . 2002b. Hadramaut dan Koloni Arab. *Republika* 13 Oktober.
- Suryadi. 2003. Minangkabau Commercial Cassettes and the Cultural Impact of the Recording Industry in

- West Sumatra. *Asian Music* 34(2): 51–89.
- 田子内 進. 1997. 「ダンドウットの成立と発展 (1) ——近代演劇の成立とオルケス・ムラユ」『東南アジア研究』35(1): 136–155.
- . 1998. 「ダンドウットの成立と発展 (2) ——オルケス・ムラユの発展とムラユ音楽」『東南アジア研究』36(3): 355–378.
- . 2001. 「インドネシアのポピュラー音楽, ダンドウットの発展——“低俗な音楽”のイメージは如何にして克服されたか」東京大学大学院総合文化研究科地域文化研究専攻提出修士論文.
- Tan, Sooi Beng. 1993. *Bangsawan: A Social and Stylistic History of Popular Malay Opera*. Singapore: Oxford University Press.
- . 1996/97. The 78 RPM Record Industry in Malaya prior to World War II. *Asian Music* 28(1): 1–41.
- 田中勝則. 1996. 『インドネシア音楽の本』東京: 北沢図書出版.
- Teeuw, A. 1980. *Sastra Baru Indonesia* 1. Ende-Flores: Nusa Indah.
- 土屋健治. 1991. 『カルティニの風景』東京: めこん.
- . 1992. 「アルマナック・ムラユ論」『東南アジア研究』30(2): 113–191.
- . 1994. 『インドネシア——思想の系譜』東京: 勁草書房.
- Wild, Colin. 1987. Indonesia: A Nation and Its Broadcasters. *Indonesia Circle* 43: 15–40.
- . 1991. The Radio Midwife: Some Thoughts on the Role Broadcasting during the Indonesian Struggle for Independence. *Indonesian Circle* 55: 34–42.
- 山本春樹. 1981. 「『インドネシア』の文化論的意味——1930年代の文化論争を通じて」『南方文化』8号: 193–207.
- 山本浩子. 1997. 「ガンバン・クロモンの起源と発展」『瓜生』(京都芸術短期大学紀要) 20: 17–26.
- Yampolsky, Philip. 1999. Commercial Recording of Traditional Music in Indonesia during Gramophone Era (1903–1942). Paper presented in Traditional Culture and Globalization “Present and Future Popular Culture in Asia” by International Advanced Studies Forum, Chubu University.
- 吉岡 修. Map of Indonesian Pop. <http://www2.u-netsurf.ne.jp>

一次資料

- Damhoer, A. 1940. *Zender NIROM*. Tjendrawasi, Medan.
- Soeara NIROM. 3 (20). 1936a. 16 October t/m 31 October. Soerabaja.
- . 3 (22). 1936b. 16 November t/m 30 November. Soerabaja.
- . 9 (1). 1942a. 4 Januari. Batavia.
- . 9 (2). 1942b. 11 Januari. Batavia.
- . 9 (3). 1942c. 18 Januari. Batavia.
- . 9 (4). 1942d. 25 Januari. Batavia.
- . 9 (9). 1942e. 1 Maart. Batavia.
- . 9 (10). 1942f. 8 Maart. Batavia.
- Soeara Timoer 1 (1). 28 December 1940–11 Januari 1941.
- The Straits Times*. 1930. Miss Riboet's Malay Dramatic Company “Orion.” April 10.
- . 1932a. The Wireless World. March 23.
- . 1932b. Malay's Wireless World. June 1.
- . 1933a. Earlier Empire Broadcast for Malaya Results of Listeners' Report. March 8.
- . 1933b. Soire-Variee ! Miss Riboet's Co. “Kronchong-Night.” March 8.
- . 1934. Broadcasting in Java. June 6.

新聞・雑誌

- Republika*. 2005. Musik Gambus Cikal Bakal Dangdut. October 11.

録音資料

〈Krontjong〉

Mawar dan Komban Krontjong by Miss Soepin, Gramophon-NS. 23 (OMH. 1031)

Tawangmangoe by Miss Annie Londow, Gramophon-NS. 23 (OMH. 1125)

Yatim dan Miskin by Miss Rambat, Gramophon-P. 22936 (OMG. 5963)

Selamat Berpisah Semua by Dinah, Gramophon-P. 22956 (OMG. 6362)

Mina Padi by Miss Lena, Colombia-GE.10112 (CEI. 40187)

Sesampol Surat by Miss Lena, Colombia-GE.10112 (CEI. 40220)

Krontjong Indian Himalaja by Miss Moor, Semarang Odeon A 204317A

Stamboel Malaise by Miss Moor, Semarang Odeon A 204317B

Krontjong Selection by Miss Lee, Odeon A 278078B

Krontjong Menjeddi hati by Miss Lem, Tjilatjap, Odeon A 204380A

Krontjong Miss Riboet by Miss Riboet, Beka 27748

Djentik Manis by Miss Riboet, Beka 27748

Waradja by Miss Riboet, Beka 27737

Geerang Pakoe Geerang by Miss Riboet, Beka 27737

〈Gamboes〉

Masuri Rakbi by Nji Raden Hadji, Gramophone-NS. 182 (OMG. 3323)

Lagoe Rakbi Arab by Nji Raden Haji, Gramophone-NS. 182 (OMG. 3324)

Hadisini by Hadji A.Moein, Odeon A 278134A

Lamantanawi by Hadji A.Moein, Odeon A 278134B

〈Harmonium〉

Jaman by Mr.S.Moehamad, Gramophone-N.T. 40 (OMH. 1278)

Aden by Mr.S.Moehamad, Gramophone-N.T. 40 (OMH. 1279)

附表 歌手・曲名リスト

〈クロンチョン音楽〉(1936.10.16～31)

歌手名	曲名	楽団名*	放送局	放送日
Abdullatif	Kr. Melihat dan Pilih	不明	全国／バンドン	10.19
Abdullatif	Ke. Hiboeran jang sedjati	不明	全国／バンドン	10.19
Abdullatif	The rail	不明	全国／バンドン	10.20
Abdullatif	The rail	不明	全国／バンドン	10.24
Abdullatif	Kr. Terang Boelan di Pasisir	不明	全国／バンドン	10.20
Abdullatif	Kr. Terang Boelan di Pasisir	不明	全国／バンドン	10.24
Aer Laoet	Kr. Solo Populair	不明	全国／バンドン	10.20
Amat	不明	不明	バタビア	10.21
Djajadi	Stamboel Krakatau	不明	スラバヤ	10.17
Djajadi	Stamboel Krakatau	不明	スラバヤ	10.23
Djajadi	Memberi pendidikan	不明	全国／バンドン	10.19
Djajadi	Memberi pendidikan	不明	スラバヤ	10.22
Djajadi	Boenga Tjempaka	不明	全国／バンドン	10.19
Djajadi	Boenga Tjempaka	不明	スラバヤ	10.22
Djajadi	Krontjong Jong Solo	不明	全国／バンドン	10.24
Djajadi	Populair Rumba	不明	全国／バンドン	10.24
Djajadi	Krontjong Sinar ketandan	不明	スラバヤ	10.24
Djajadi	Krontjong d'Amour	不明	全国／バンドン	10.27
Djajadi	Krontjong d'Amour	不明	全国／バンドン	10.30
Djajadi	Krontjong De Morgen Ster	不明	全国／バンドン	10.27
Djajadi	Stamboel Solo bij Nacht	不明	全国／バンドン	10.27
Djajadi	Krontjong S. K. C. bij Nacht	不明	全国／バンドン	10.27
Djajadi	Krontjong Smeroe	不明	スラバヤ	10.28
Djajadi	Krontjong Merinti Tjinta	不明	スラバヤ	10.28
Djajadi	Sinar Solo	不明	全国／バンドン	10.30
Djajadi	Bangoen-bangoen	不明	全国／バンドン	10.30
Djajadi	Solo bij Nacht	不明	全国／バンドン	10.30
Djakpar	Kr. Paman Tani	不明	全国／バンドン	10.20
Djakpar	Gila basa	不明	全国／バンドン	10.20
Djakpar	Gila basa	不明	全国／バンドン	10.30
Djakpar	Menjesal Blakangan	不明	スラバヤ	10.21
Djakpar	Sraka Rumba	不明	スラバヤ	10.21
Djakpar	Melamoen dibawah sinar remboelan	不明	スラバヤ	10.21
Djakpar	Melamoen dibawah sinar remboelan	不明	全国／バンドン	10.24
Djakpar	Idoeng Belang	不明	スラバヤ	10.21
Djakpar	Idoeng Belang	不明	全国／バンドン	10.24
Djakpar	Ingat-ingat diwaktoe meoda	不明	スラバヤ	10.21
Djakpar	Ingat-ingat diwaktoe meoda	不明	全国／バンドン	10.30
Djakpar	Tjinta jang tidak terbales	不明	スラバヤ	10.21
Djakpar	Tjinta jang tidak terbales	不明	全国／バンドン	10.30
Djakpar	Paman Tani	不明	全国／バンドン	10.30
Gadjali	Swara dari Sorga	不明	スラバヤ	10.26
Gadjali	Moesim Semi	不明	スラバヤ	10.26
Hanafie	Krontjong Sesak Dalem Penghidoepan	不明	スラバヤ	10.17
Hardjo & Ismail	Donna Doneta	不明	スラバヤ	10.16
Hardjo & Ismail	Kr.Orientale	不明	スラバヤ	10.19
Hardjo & Ismail	Kore-Korena	不明	全国／バンドン	10.23
Hardjo & Ismail	Impian jang merindoekan	不明	全国／バンドン	10.23
Hardjo & Ismail	Impian jang merindoekan	不明	全国／バンドン	10.28

田子内：植民地期インドネシアにおけるラジオ放送の開始と音楽文化

〈クロンチヨン音楽〉(1936.10.16～31) 続き

歌手名	曲名	楽団名*	放送局	放送日
Hardjo & Ismail	Ali Baba Rumba	不明	全国／バンドン	10.23
Hardjo & Ismail	Ali Baba Rumba	不明	全国／バンドン	10.28
Jan Boen	Shanghai Rumba	不明	スラバヤ	10.18
Jan Boen	Satoe poelau jang indah	不明	スラバヤ	10.18
Jan Boen	Djalan-djalan	不明	スラバヤ	10.22
Jan Boen	Berdjandji jang tentoe	不明	スラバヤ	10.22
Jan Boen	Carioca Rumba	不明	スラバヤ	10.29
Jan Boen	Oh! Ajahkoe	不明	スラバヤ	10.29
John Iseger	Krontjong V.O.S	不明	全国／バンドン	10.26
John Iseger	Krontjong K.K.K	不明	全国／バンドン	10.26
Katirin	Bapa' Tani Blues	不明	スラバヤ	10.18
Katirin	Kesangsarahan Doenia Waltz	不明	スラバヤ	10.18
Kwa Toemboe	Dokter Kwa Toemboe	不明	スラバヤ	10.25
Kwa Toemboe	Gado-Gado Toemboe	不明	スラバヤ	10.25
Kwa Toemboe	Teka Teki di Kapal Roesak	不明	全国／バンドン	10.31
Kwa Toemboe	Extra: Pasir Inten	不明	全国／バンドン	10.31
Kwa Toemboe	Extra: Sarinten	不明	全国／バンドン	10.31
Kwa Toemboe	Extra: Djanda Perzie	不明	全国／バンドン	10.31
Leo Spell	Bintang malem	不明	全国／バンドン	10.22
Leo Spell	Pagi Sore	不明	全国／バンドン	10.22
Leo Spell	Kr. Delima	不明	スラバヤ	10.22
Leo Spell	Stamboel Prahoe	不明	スラバヤ	10.22
Leo Spell	Krontjong Soerabaia	不明	全国／バンドン	10.24
Leo Spell	Krontjong Please	不明	スラバヤ	10.24
Leo Spell	Rumba slamat malam	不明	スラバヤ	10.24
Leo Spell	Rumba Bintang malam	不明	スラバヤ	10.24
Leo Spell	Stamboel Tengah malam	不明	スラバヤ	10.24
Leo Spell	Stamboel Pasar Tjiplak	不明	スラバヤ	10.25
Leo Spell	Krontjong V.O.S Batavia	不明	スラバヤ	10.25
Leo Spell	Krontjong V.O.S Batavia	不明	全国／バンドン	10.26
Leo Spell	Krontjong Indo-Java	不明	全国／バンドン	10.26
Leo Spell	Krontjong Koentji kesenengan	不明	全国／バンドン	10.26
Leo Spell	Stamboel Dubble I	不明	全国／バンドン	10.26
Leo Spell	Krontjong West-Java	不明	全国／バンドン	10.26
Leo Spell & Siti Amsah	Stamboel Betawi-Malang	不明	全国／バンドン	10.26
Louis Koch	Kr. Nonna Tjantik	不明	スラバヤ	10.19
Mardjo	Kr. Bintang pagi	不明	全国／バンドン	10.20
Miss Anna Liem	Kr. Siapa Itoe	不明	全国／バンドン	10.20
Miss Anna Liem	Kr. Bersama-sama poelang	不明	全国／バンドン	10.20
Miss Annie	Slamet Tidoer	不明	スラバヤ	10.15
Miss Annie	Slamet Tidoer	不明	全国／バンドン	10.23
Miss Annie	Slamet Tidoer	不明	全国／バンドン	10.28
Miss Annie Landouw	Rumba Tawang Mangoe	不明	スラバヤ	10.24
Miss Eulis	Dimana Koe moesti tjari	不明	スラバヤ	10.22
Miss Eulis	Angin Toefan	不明	スラバヤ	10.22
Miss Eulis	Krontjong Meratap	不明	スラバヤ	10.26
Miss Eulis	Selamat pagi toran moeda	不明	スラバヤ	10.26
Miss Eulis & S. Abdullah	Romeo dan Julia	不明	スラバヤ	10.24
Miss Eulis & S. Abdullah	Tjinta jang boeta	不明	スラバヤ	10.24
Miss Herlaut	Extra: Perasa'an	不明	スラバヤ	10.17

〈クロンチヨン音楽〉(1936.10.16～31) 続き

歌手名	曲名	楽団名*	放送局	放送日
Miss Herlaut & Soenarno	Kr. Merajoe Wals	不明	スラバヤ	10.22
Miss Ida	Perzie pasar Senen	不明	全国／バンドン	10.24
Miss Ida	Tjinta Publiek	不明	全国／バンドン	10.24
Miss Ida & Pe de Rozario	Krontjong Moonlight	不明	スラバヤ	10.16
Miss Ida & Pe de Rozario	O! mijn schat	不明	スラバヤ	10.20
Miss Ida & Pe de Rozario	Persi jang kapot	不明	スラバヤ	10.20
Miss Iem	Krontjong Gadjah Biroe	不明	スラバヤ	10.16
Miss Iem	Krontjong Gadjah Biroe	不明	全国／バンドン	10.17
Miss Iem	Krontjong Gadjah Biroe	不明	スラバヤ	10.21
Miss Iem	Krontjong Gadjah Biroe	不明	全国／バンドン	10.27
Miss Iem	Krontjong Noesa Kambangan	不明	スラバヤ	10.16
Miss Iem	Krontjong Noesa Kambangan	不明	全国／バンドン	10.17
Miss Iem	Krontjong Noesa Kambangan	不明	スラバヤ	10.21
Miss Iem	Krontjong Noesa Kambangan	不明	全国／バンドン	10.23
Miss Iem	Krontjong Noesa Kambangan	不明	全国／バンドン	10.27
Miss Iem	Rumba Andjasmara	不明	全国／バンドン	10.19
Miss Iem	Rumba Andjasmara	不明	スラバヤ	10.21
Miss Iem	Rumba Andjasmara	不明	全国／バンドン	10.17
Miss Iem	Kr. Nasib Pertjintaan	不明	全国／バンドン	10.17
Miss Iem	Kr. Nasib Pertjintaan	不明	全国／バンドン	10.19
Miss Iem	Kr. Nasib Pertjintaan	不明	スラバヤ	10.21
Miss Iem	Tjinta Stamboel	不明	スラバヤ	10.21
Miss Iem	Tango Rumba	不明	スラバヤ	10.21
Miss Iem	Souvenir van Batavia	不明	全国／バンドン	10.17
Miss Iem	Stamboel Boenga Karang	不明	全国／バンドン	10.23
Miss Iem	Extra: Oedjan di Deli	不明	全国／バンドン	10.23
Miss Iem	Extra: Oedjan di Deli	不明	スラバヤ	10.24
Miss Iem	Extra: Terang Boelan	不明	全国／バンドン	10.23
Miss Iem	Extra: Kembang Delima	不明	全国／バンドン	10.23
Miss Iem	Extra: Kembang Delima	不明	スラバヤ	10.30
Miss Iem	Krontjong Matahari	不明	全国／バンドン	10.23
Miss Iem	Rumba Souvenir van Batavia	不明	全国／バンドン	10.23
Miss Iem	Rumba Souvenir van Batavia	不明	スラバヤ	10.30
Miss Iem	Extra: d'Orient (Java)	不明	全国／バンドン	10.23
Miss Iem	Kr. Gajah Biroe	不明	全国／バンドン	10.23
Miss Iem	Souvenir Banjoemas	不明	全国／バンドン	10.24
Miss Iem	Krontjong Aer Laoet	不明	スラバヤ	10.25
Miss Iem	Stamboel Berpisah	不明	スラバヤ	10.25
Miss Iem & Hanafie	Extra: Combinatie	不明	スラバヤ	10.17
Miss Iem & Miss Moor	Beginji rasanja berpisah	不明	スラバヤ	10.28
Miss Iem & Dikin	Stamboel Idoep sendiri	不明	スラバヤ	10.28
Miss Jacoba	Oh! Doewit	不明	スラバヤ	10.17
Miss Jacoba	Tandjoeng Kandis	不明	スラバヤ	10.17
Miss Jacoba	Olah Bapa Dja	不明	スラバヤ	10.23
Miss Jacoba	Hati Iboe	不明	スラバヤ	10.23
Miss Jacoba	Badendang Anak Timoer	不明	スラバヤ	10.26
Miss Jacoba	Hai Kawankoe	不明	スラバヤ	10.26
Miss Jacoba	Mande mande	不明	スラバヤ	10.29
Miss Jacoba	Sioh Ambon	不明	スラバヤ	10.29
Miss Lasmi	Kr. Bakoe-bakoe	不明	全国／バンドン	10.20

田子内：植民地期インドネシアにおけるラジオ放送の開始と音楽文化

〈クロンチョン音楽〉(1936.10.16～31) 続き

歌手名	曲名	楽団名*	放送局	放送日
Miss Lasmi	Radiana Rumba	不明	スラバヤ	10.23
Miss Lasmi	Siwa Tango	不明	スラバヤ	10.23
Miss Lasmi	Krontjong Parijs van Java	不明	スラバヤ	10.25
Miss Lasmi	Krontjong Beautiful Rainbow	不明	スラバヤ	10.25
Miss Lasmi	Riwaja Rumba	不明	スラバヤ	10.29
Miss Lasmi & Soenarno	Stamboel "Dewi Moeria"	不明	スラバヤ	10.18
Miss Lasmi & Soenarno	Kr. Bakoe-bakoe	不明	スラバヤ	10.19
Miss Lasmi & Soenarno	St. "Blauwe Donau"	不明	スラバヤ	10.19
Miss Lasmi & Soenarno	St. "Blauwe Donau"	不明	全国／バンドン	10.20
Miss Lasmi & Soenarno	Riwaja Rumba	不明	全国／バンドン	10.20
Miss Lasmi & Soenarno	Riwaja Rumba	不明	全国／バンドン	10.22
Miss Lasmi & Soenarno	Boelan Poernama Rumba	不明	全国／バンドン	10.22
Miss Lee	Krontjong Miss Lee	不明	スラバヤ	10.18
Miss Lee	Krontjong Carioca	不明	スラバヤ	10.18
Miss Lee	Kr. "Selection"	不明	全国／バンドン	10.19
Miss Lee	Dippingir Laoet dari Bali	不明	全国／バンドン	10.19
Miss Lee	Patjar merah	不明	スラバヤ	10.22
Miss Lee	Patjar merah	不明	全国／バンドン	10.30
Miss Lee	Doedoek diatas goenoeng	不明	スラバヤ	10.22
Miss Lee	Doedoek diatas goenoeng	不明	全国／バンドン	10.30
Miss Lee & Leo Spell	Rumba Pagi Sore	不明	スラバヤ	10.24
Miss Moor	Extra: Moorah Rumba	不明	スラバヤ	10.17
Miss Moor	Jaarmarkt Rumba	不明	全国／バンドン	10.22
Miss Moor	Jaarmarkt Rumba	不明	全国／バンドン	10.29
Miss Moor	Soerabaja Rumba	不明	全国／バンドン	10.22
Miss Moor	Soerabaja Rumba	不明	全国／バンドン	10.29
Miss Moor	Soerabaja Rumba	不明	スラバヤ	10.30
Miss Moor	Stamboel Goenoeng Ringgit	不明	スラバヤ	10.23
Miss Moor	Krontjong Soerabaia	不明	スラバヤ	10.23
Miss Moor	Krontjong Manisnja Penghidoepan	不明	全国／バンドン	10.24
Miss Moor	Krontjong Dajoeng Pasisir	不明	全国／バンドン	10.24
Miss Moor	Jaarmarkt Rumba	不明	スラバヤ	10.24
Miss Moor	Tango nasibnja satoe prampoean	不明	スラバヤ	10.24
Miss Moor	Tidoer mengimpi	不明	スラバヤ	10.25
Miss Moor	Koentjinja kesenengan	不明	スラバヤ	10.25
Miss Moor	Mani Rumba	不明	全国／バンドン	10.29
Miss Moor	Stamboel Solo Guitaar	不明	全国／バンドン	10.29
Miss Moor	Stamboel Sorga Doenia	不明	全国／バンドン	10.29
Miss Moor	Krontjong Telomojo	不明	全国／バンドン	10.29
Miss Moor	Stamboel Rioe	不明	全国／バンドン	10.29
Miss Moor	Stamboel Rioe	不明	スラバヤ	10.30
Miss Moor	Nasibnja Satoe Prempoean	不明	全国／バンドン	10.29
Miss Moor & Leo Spell	Extra: Taman Penghiboer	不明	スラバヤ	10.17
Miss Roekia	Soerga Rumba	不明	スラバヤ	10.20
Miss Roekia	Kr. Soera Melamoen	不明	スラバヤ	10.20
Miss Roekia	Krontjong Billiton bij Nacht	不明	スラバヤ	10.24
Miss Roekia	Rumba trang boelan di Kalamua	不明	スラバヤ	10.24
Miss Roeslin	Extra: Sajang-sajang	不明	スラバヤ	10.17
Miss Roeslin	Manilla	不明	スラバヤ	10.19
Miss Roeslin	Soesahnja Mentjari	不明	スラバヤ	10.19

〈クロンチョン音楽〉(1936.10.16～31) 続き

歌手名	曲名	楽団名*	放送局	放送日
Miss Roeslin	Apa Ditjari	不明	スラバヤ	10.22
Miss Roeslin	Extra: Sajang-sajang	不明	スラバヤ	10.26
Miss Roeslin	Stamboel Oh! Kekasihkoe	不明	スラバヤ	10.26
Miss Roeslin	Buitenzorg Love Song	不明	スラバヤ	10.28
Miss Roeslin	Pajoeng Djepang	不明	スラバヤ	10.28
Miss Roeslin	Ijs Podding	不明	スラバヤ	10.29
Miss Roeslin	Gadis Piatoe	不明	スラバヤ	10.29
Miss Soe Ien	Stamboel Meratap	不明	スラバヤ	10.15
Miss Soe Ien	Stamboel Meratap	不明	全国／バンドン	10.23
Miss Soe Ien	Stamboel Meratap	不明	全国／バンドン	10.28
Miss Soe-Inah	Teringet-inget	不明	スラバヤ	10.22
Miss Soe-Inah	Melamoen	不明	スラバヤ	10.22
Miss Soe-Inah	Rumba Prempoean Sial	不明	スラバヤ	10.24
Miss Soe-Inah	Kemana Pergi	不明	スラバヤ	10.24
Miss Soekini	Kr. Tjinta Tenggelem	不明	スラバヤ	10.17
Miss Soekini	Kr. Tjinta Tenggelem	不明	全国／バンドン	10.19
Miss Soekini	Krontjong Plesir	不明	スラバヤ	10.17
Miss Soekini	Krontjong Plesir	不明	全国／バンドン	10.19
Miss Soelami	Ketjele Rumba	不明	スラバヤ	10.18
Miss Soelami	Selamat Berpisah	不明	スラバヤ	10.18
Miss Soelami	Hidoep Roekoen	不明	スラバヤ	10.19
Miss Soelami & S. Moeljadi	Termenoeng-menoeng Roemba	不明	スラバヤ	10.19
Miss Soepia	Tjintanja satoe Iboe	不明	スラバヤ	10.16
Miss Soepia	Taman Boenga Melati	不明	スラバヤ	10.16
Miss Soepiah	Mawar dan Kombang	不明	スラバヤ	10.24
Miss Tarmina	Jong Java	不明	スラバヤ	10.19
Miss Tarmina	Jong Java	不明	スラバヤ	10.30
Miss Tarmina	Melamoen dipinggir laout	不明	スラバヤ	10.19
Miss Tarmina	Melamoen dipinggir laout	不明	スラバヤ	10.30
Miss Tarmina	Nangka Ampat	不明	スラバヤ	10.22
Miss Tarmina	Delima Manis	不明	スラバヤ	10.28
Miss Tarmina	Krontjong Please	不明	スラバヤ	10.28
Miss Tioe	Krontjong merinti diwaktoe malam	A	スラバヤ	10.18
Miss Tioe	Krontjong P. T.	A	スラバヤ	10.18
Miss Tioe	Stamboel II	A	スラバヤ	10.18
Miss Tioe	Shadow Waltz	A	スラバヤ	10.18
Miss Tioe	Stamboel Toeloeng Agoeng	不明	全国／バンドン	10.24
Miss Tioe	Stamboel Toeloeng Agoeng	不明	全国／バンドン	10.25
Miss Tioe	Krontjong Merajap	不明	全国／バンドン	10.24
Miss Tioe	Krontjong Merajap	不明	全国／バンドン	10.25
Miss Tioe	Meroesak Ati	不明	全国／バンドン	10.25
Miss Tioe	Extra: Rindoe malam	不明	全国／バンドン	10.25
Miss Tioe	Tjandi bij Nacht	不明	全国／バンドン	10.27
Miss Tioe	Krontjong Slamet Pagi	A	スラバヤ	10.31
Miss Tioe	Lenggang lenggang Kankoeng	A	スラバヤ	10.31
Miss Tioe	Stamboel Oh! Iboe	A	スラバヤ	10.31
Miss Tioe	Krontjong Jacatra	A	スラバヤ	10.31
Miss Titing	Kr. Rindoe Hati	不明	スラバヤ	10.20
Miss Titing	Rumba Djangan soesah hati	不明	スラバヤ	10.20
Miss Tjoa	St. Nasibkoe	不明	全国／バンドン	10.19

田子内：植民地期インドネシアにおけるラジオ放送の開始と音楽文化

〈クロンチョン音楽〉(1936.10.16～31) 続き

歌手名	曲名	楽団名*	放送局	放送日
Miss Tjoa	St. Nasibkoe	不明	スラバヤ	10.20
Miss Tjoa	Kr. Boeroeng walet	不明	全国／バンドン	10.19
Miss Tjoa	Kr. Boeroeng walet	不明	スラバヤ	10.20
Miss Toemina	Krontjong Kenes	不明	全国／バンドン	10.25
Miss Toemina	Jonge Planten	不明	全国／バンドン	10.25
Miss Toemina	Jonge Planten	不明	全国／バンドン	10.27
Miss Toemina	Nasib	不明	全国／バンドン	10.30
Miss Toemina	Camarado	不明(Live)	全国／バンドン	10.30
Miss Toemina & Tioe	Masoe kampoeng keloear kampoeng	不明	全国／バンドン	10.25
Miss Toemina & Tioe	Twee witte rozen	不明	全国／バンドン	10.25
Miss Toemina	不明	不明	バタビア	10.21
Mr. Katirin	Kr. Peoter Kajoen	不明	スラバヤ	10.19
Mr. Katirin & Mr.Jack	Oedara Gelap Oedara Angin	不明	スラバヤ	10.19
Mr. Wim	Boeroung Oorlian	不明	スラバヤ	10.16
Mr. Wim	Pagi Sore	不明	スラバヤ	10.16
Mr. Wim	Nonna Manis	不明	スラバヤ	10.28
Mr. Wim	Nasehat	不明	スラバヤ	10.28
Paidjo	Krontjong Kris	不明	スラバヤ	10.23
Paidjo	Krontjong Kris	不明	全国／バンドン	10.24
Paidjo	Stamboel Bantjeu	不明	スラバヤ	10.23
Paidjo	Stamboel Bantjeu	不明	全国／バンドン	10.24
Pe de Rozario	Krontjong Cucaracha	不明	全国／バンドン	10.28
Pe De Rozario	Kr. Cucaracha	不明	全国／バンドン	10.23
S. Moeljadi	Nachtegaal's Blues	A	スラバヤ	10.18
S. Moeljadi	Sweet Memory	A	スラバヤ	10.18
S. Moeljadi	Melamoen dibawah sinarnja boelan	A	スラバヤ	10.18
S. Moeljadi	Rumba (Rosy Cheeks)	A	スラバヤ	10.18
S. Moeljadi	Krontjong Oh! Lady	A	スラバヤ	10.31
S. Moeljadi	Rumba	A	スラバヤ	10.31
S. Moeljadi	Penghiboer Hati	A	スラバヤ	10.31
S. Moeljadi	De Nacht Souvenir	A	スラバヤ	10.31
S. Mohammad	Rumba Sorga Doenia	不明	スラバヤ	10.17
S. Mohammad	Rumba Gelombang Penghidoepan	不明	スラバヤ	10.17
S. Mohammad	Eljonora	不明	スラバヤ	10.19
S. Mohammad	Hantjoer	不明	スラバヤ	10.19
S. Abdullah	Stamboel Toeloenglah Orang Miskin	不明	スラバヤ	10.15
S. Abdullah	Tina Tango	不明	スラバヤ	10.15
S. Abdullah	Satoe Antara Beriboe	不明	スラバヤ	10.16
S. Abdullah	Hati Soetji	不明	スラバヤ	10.16
S. Abdullah	Radja Wang (Blues)	不明	全国／バンドン	10.17
S. Abdullah	Radja Wang	不明	全国／バンドン	10.28
S. Abdullah	Radja Wang	不明	スラバヤ	10.29
S. Abdullah	Rumba Krontjong	不明	スラバヤ	10.17
S. Abdullah	Kewadjiban Swami (Tango)	不明	全国／バンドン	10.17
S. Abdullah	Kewadjiban Swami	不明	全国／バンドン	10.28
S. Abdullah	Kewadjiban Swami	不明	スラバヤ	10.29
S. Abdullah	Rindoe	不明	スラバヤ	10.17
S. Abdullah	Fadjar Blues	不明	スラバヤ	10.20
S. Abdullah	Fadjar Blues	不明	全国／バンドン	10.23
S. Abdullah	Tjoetja Terang	不明	スラバヤ	10.20

〈クロンチヨン音楽〉(1936.10.16～31) 続き

歌手名	曲名	楽団名*	放送局	放送日
S. Abdullah	Dermawan Blues	不明	スラバヤ	10.22
S. Abdullah	Gloudoek boenji oedjan ta' toeroen	不明	スラバヤ	10.22
S. Abdullah	Pemaboekan	不明	スラバヤ	10.22
S. Abdullah	Swara dari Rimboe	不明	スラバヤ	10.22
S. Abdullah	Nona Manis	不明	全国／バンドン	10.23
S. Abdullah	Nona Manis	不明	全国／バンドン	10.28
S. Abdullah	Mimpi Waltz	不明	スラバヤ	10.23
S. Abdullah	Harta Doenia	不明	スラバヤ	10.23
S. Abdullah	Dari mana datangnja Krontjong	不明	スラバヤ	10.26
S. Abdullah	Moesim Oedjan	不明	スラバヤ	10.26
S. Abdullah	Mata setan (Tango)	不明	全国／バンドン	10.17
S. Abdullah	Mata setan	不明	スラバヤ	10.26
S. Abdullah	Kerna si nonnah	不明	スラバヤ	10.26
S. Abdullah	Mega Poetih	不明	全国／バンドン	10.28
S. Abdullah	Malaise	不明	全国／バンドン	10.28
S. Abdullah	Tjap Djie Kie	不明	全国／バンドン	10.28
S. Abdullah	Boeroeng Dara Boeloe Biroe	不明	全国／バンドン	10.28
S. Abdullah	Tjinta dan harta	不明	全国／バンドン	10.28
S. Abdullah	Krontjong Werkoos	不明	全国／バンドン	10.28
S. Abdullah	Krontjong Djangan Tjoerang	不明	全国／バンドン	10.28
S. Abdullah	Doeloe dan sekarang	不明	スラバヤ	10.28
S. Abdullah	Teroembang-ambing ditengah laoetan	不明	スラバヤ	10.28
S. Abdullah	Nonna-nonna djaman sekarang	不明	スラバヤ	10.30
S. Abdullah	Werkloos	不明	スラバヤ	10.30
S. Abdullah	Koeda Sembrani	不明	スラバヤ	10.30
S. Abdullah	Betjere kasih	不明	スラバヤ	10.30
S. Abdullah／Miss Iem	Kembang Delima	不明	全国／バンドン	10.17
S. Abdullah／Miss Iem	Ratapan kaoem miskin (Stamboel)	不明	全国／バンドン	10.17
S. Abdullah／Miss Iem	Krontjong Holiday (Rumba)	不明	全国／バンドン	10.17
S. Abdullah／Miss Iem	Kerna si nona (Blues)	不明	全国／バンドン	10.17
S. Abdullah／Miss Iem	Memindjem Boedi	不明	全国／バンドン	10.17
S. Abdullah／Miss Iem	H.M.V. Krontjong Speciaal	不明	全国／バンドン	10.17
Saban	Saban Rumba	不明	全国／バンドン	10.20
Saban	Saban Rumba	不明	全国／バンドン	10.22
Sahib Radja	Krontjong Het Paradijs	不明	全国／バンドン	10.30
Sarono	Kr. Salak Djawa	不明	スラバヤ	10.20
Sarono	Stamboel Oh! Annie	不明	スラバヤ	10.20
Sarono	Oedjan Pabaroe	不明	スラバヤ	10.23
Sarono	Na elfen	不明	スラバヤ	10.23
Sarpin	Krontjong Dasar Nasib	不明	スラバヤ	10.17
Sarpin	Krontjong Dasar Nasib	不明	スラバヤ	10.23
Sarpin	Soesahnja mentjari sesoewap nasi	不明	全国／バンドン	10.22
Siti Amsah	Stamboel Sam Kang	不明	全国／バンドン	10.30
Siti Amsah	Krontjong The Lady	不明	全国／バンドン	10.30
Siti Amsah	Amsah Rumba	不明	全国／バンドン	10.30
Soekamto	Krontjong Bloem va Java	不明	スラバヤ	10.17
Soekamto	Stamboel Toedjoe Sorga	不明	スラバヤ	10.17
Soekamto	Kr. Hati Boedi	不明	全国／バンドン	10.19
Soekamto	St. Saia Tjinta	不明	全国／バンドン	10.19
Soekamto	Saling menjinta	不明	全国／バンドン	10.19

田子内：植民地期インドネシアにおけるラジオ放送の開始と音楽文化

〈クロンチョン音楽〉(1936.10.16～31) 続き

歌手名	曲名	楽団名*	放送局	放送日
Soekamto	Kr. Hidoep dalem soesah	不明	全国／バンドン	10.19
Soekamto	Krontjong Parijs van Java	不明	スラバヤ	10.24
Soekamto	Stamboel Kotta Soenan	不明	スラバヤ	10.24
Soekamto	Krontjong Night man	不明	スラバヤ	10.24
Soekamto	Krontjong Jacatra	不明	スラバヤ	10.25
Soekamto	Krontjong Terang Boelan	不明	スラバヤ	10.25
Soekamto	Rumba Djangan Loepa	不明	スラバヤ	10.29
Soekamto	Krontjong Item Manis	不明	スラバヤ	10.29
Soekamto	Rumba Oedjan Angin	不明	スラバヤ	10.30
Soekamto	Krontjong Menjoe	不明	スラバヤ	10.30
Soenarto	Blue Soerakarta Serenade	不明	スラバヤ	10.17
Soenarto	Krontjong “The Golden gate”	不明	スラバヤ	10.18
Soeparto	Boelan Poernama Rumba	不明	全国／バンドン	10.20
Soeparto	Boelan Poernama Rumba	不明	スラバヤ	10.29
The Soerabaia Players	Orkest Krontjong Telomojo	不明	全国／バンドン	10.31
The Soerabaia Players	Krontjong Achmat Bandoeng	不明	全国／バンドン	10.31
The Soerabaia Players	Orkest Stamboel II	不明	全国／バンドン	10.31
The Soerabaia Players	Stamboel Achmat Bandoeng	不明	全国／バンドン	10.31
Tjay	Kr. Slamet dateng	不明	全国／バンドン	10.20
不明	Krontjong Rimba malem	B	全国／バンドン	10.18
不明	Krontjong Aral	B	全国／バンドン	10.18
不明	Krontjong Jacatra	B	全国／バンドン	10.18
不明	Stamboel masoek kampoeng kelewar kampoeng	B	全国／バンドン	10.18
不明	krontjong Pegang-Kemoedi	B	全国／バンドン	10.18
不明	Kembang katjang	B	全国／バンドン	10.18
不明	Djali-djali	B	全国／バンドン	10.18
不明	Stamboel slamet tidoer	B	全国／バンドン	10.18
不明	不明	D	バタビア	10.19
不明	不明/Rumba Krontjong	C	スラバヤ	10.27
不明	不明	E	バタビア	10.30
不明	不明	E	ソロ	10.30
不明	不明	E	ジョクジャカルタ	10.30
不明	不明	E	スマラン	10.30
不明	Krontjong Soerabaia	不明	全国／バンドン	10.26

* : A = De Nachtegaal (Studio NIROM), B = Jong Indonesische Moesik (Jim), C = Monte Carlo
D = Sinar Batavia dpp. M.Sagi (dpp. 以下は楽団のリーダー名。dpp = dibawah pimpinan)
E = Jeugdvereniging K'satria M.N

〈ムラユ音楽〉(1936.10.16～31)

歌手名	曲名	楽団名*	放送局	放送日
Hussain	Hekmat Prempoean	不明	全国／バンドン	10.29
Hussain	Karangan Chandu	不明	全国／バンドン	10.29
Jaar	Sinaran Masri	不明	全国／バンドン	10.29
John Iseger	Extra Tje Mamat	不明	全国／バンドン	10.18
John Iseger	Extra Nacht Sirenen	不明	全国／バンドン	10.18
Ma' Enang & Hung Tuah	Dendang Sajang Ka I sampai 4	A	スラバヤ	10.26
Miss Dja	Boenga Dalima	不明	全国／バンドン	10.18
Miss Dja	Sajang Hati	不明	全国／バンドン	10.18
Miss Dja	不明	不明	全国／バンドン	10.28

〈ムラユ音楽〉(1936.10.16～31) 続き

歌手名	曲名	楽団名*	放送局	放送日
Miss Dorah	Slendang Pelangi	不明	全国／バンドン	10.29
Miss Dorah	Lili-lili	不明	全国／バンドン	10.29
Miss Dorah	Sri Soerabaja	不明	全国／バンドン	10.29
Miss Dorah & Rubiah & Safiah	Mascot	不明	全国／バンドン	10.29
Miss Maimoon	不明	不明	全国／バンドン	10.21
Miss Maimoon	Maimoon Stamboel	B	全国／バンドン	10.27
Miss Maimoon	Anak Raja Baradu	B	スラバヤ	10.29
Miss Maimoon/Miss Alang	Dimana gigimoe	不明	全国／バンドン	10.23
Miss Maimoon/Miss Alang	Yip Ala Yip	不明	全国／バンドン	10.23
Miss Maimoon/Miss Alang	Ach, ach Boeaja	不明	全国／バンドン	10.23
Miss Maimoon/Miss Alang	Koleh-koleh	不明	全国／バンドン	10.23
Miss Maimoon/Miss Alang	Anak Tiong	不明	全国／バンドン	10.23
Miss Maimoon/Miss Alang	Suarah Singapore	不明	全国／バンドン	10.23
Miss Maimoon/Miss Alang	Sembawa Balik	不明	全国／バンドン	10.23
Miss Maimoon/Miss Alang	Seray Ache	不明	全国／バンドン	10.23
Miss Maimoon/Miss Tijah/Miss Salmah	Selendang Delima I	不明	全国／バンドン	10.24
Miss Maimoon/Miss Tijah/Miss Salmah	Selendang Delima II	不明	全国／バンドン	10.24
Miss Maimoon/Miss Tijah/Miss Salmah	Sitibaida I	不明	全国／バンドン	10.24
Miss Maimoon/Miss Tijah/Miss Salmah	Sitibaida II	不明	全国／バンドン	10.24
Miss Maimoon/Miss Tijah/Miss Salmah	Nasib Serawak	不明	全国／バンドン	10.24
Miss Maimoon/Miss Tijah/Miss Salmah	Tijah Rumba	不明	全国／バンドン	10.24
Miss Maimoon/Miss Tijah/Miss Salmah	Nasib Pariaman	不明	全国／バンドン	10.24
Miss Maimoon/Miss Tijah/Miss Salmah	Sri Serdang	不明	全国／バンドン	10.24
Miss Maimoon/Miss Tijah/Miss Salmah	Mana Dia	不明	全国／バンドン	10.24
Miss Maimoon/Miss Tijah/Miss Salmah	Sereh Serawak	不明	全国／バンドン	10.24
Miss Maimoon/Miss Tijah/Miss Salmah	Umbon Apai di Goenoeng Ladang	不明	全国／バンドン	10.24
Miss Naimah	Siti Zaibaida I	B	全国／バンドン	10.27
Miss Naimah	Siti Zaibaida II	B	全国／バンドン	10.27
Miss Naimah	Bidasari I	B	全国／バンドン	10.27
Miss Naimah	Bidasari I	B	スラバヤ	10.29
Miss Naimah	Bidasari II	B	全国／バンドン	10.27
Miss Naimah	Bidasari II	B	スラバヤ	10.29
Miss Riboet	不明	不明	全国／バンドン	10.28
Miss Salmah	Chantek Manis	B	全国／バンドン	10.27
Miss Salmah	Chrachup	B	スラバヤ	10.29
Miss Tijah	不明	不明	全国／バンドン	10.21
Miss Tijah	Laila manja	B	全国／バンドン	10.27
Miss Tijah	Tijah Kronchong	B	全国／バンドン	10.27
Miss Tijah	Bachang Manis	—	—	—
Miss Tijah	Nenek di Goenoeng Ladang	不明	全国／バンドン	10.24
Miss Tijah	Nenek di Goenoeng Ladang	B	スラバヤ	10.29
Miss Tijah	Umbon Apai Gunong ladang	B	スラバヤ	10.29
Miss Tijah & K.Dean	Dondang Sajang I-IV	B	全国／バンドン	10.27
Mr. K. Dean	Mendoo Bentan	B	スラバヤ	10.29
Rubiah	Senyom Pernama	不明	全国／バンドン	10.29
Si Item	Selamet Tinggal	不明	全国／バンドン	10.18
Si Item	Ballore	不明	全国／バンドン	10.18
Siti Amsah	Rindoe malem	不明	全国／バンドン	10.18
Siti Amsah	Sirih Koenig	不明	全国／バンドン	10.18
不明	不明	C	全国／バンドン	10.20

〈ムラユ音楽〉(1936.10.16～31) 続き

歌手名	曲名	楽団名*	放送局	放送日
不明	不明	C	バタビア	10.20
不明	Jula Juli Bintang Tiga	D	スラバヤ	10.20
不明	Selamat Tinggal	D	スラバヤ	10.20
不明	不明	E	全国／バンドン	10.28
不明	不明	F	バタビア	10.24

* : A = Malay Opera dari Singapore, B = 不明 (lagu Moelaju dari Singapore),
 C = Orkest Soematra Tikam Toea dpp. Anwar, D = Deans Grand Opera, Singapore
 E = Harmony-Orkest “Pendis” dpp. Noerdin, F = Penghiboer Hati dpp. Mohamad Damiri
 なお、歌手が複数明記されている場合には、どの歌手が実際に歌ったのか不明であることを示す。

〈アラブ音楽〉(1936.10.16～31)

歌手名	曲名	楽団名*	放送局	放送日
Abdul kader	不明	不明	全国／バンドン	10.28
Abdul kader	不明	不明	全国／バンドン	10.30
Hasan Lahzah	不明	不明	全国／バンドン	10.21
Hasan Lahzah	不明	不明	全国／バンドン	10.31
Mansjoor	不明	不明	全国／バンドン	10.28
Mochmoed Saad	不明	不明	全国／バンドン	10.24
Mochmoed Saad	不明	不明	全国／バンドン	10.30
Om Kalsoum	不明	不明	全国／バンドン	10.21
Om Kalsoum	不明	A	スラバヤ	10.22
R. H. Djoelaeha	不明	不明	全国／バンドン	10.31
不明	Zah Rattoel Hoeb	B	スラバヤ	10.21
不明	Extra: Melajoe	B	スラバヤ	10.21
不明	Al Gejal	B	スラバヤ	10.21
不明	Extra: Melajoe	B	スラバヤ	10.21
不明	Nallet Alla Jadiha	B	スラバヤ	10.21
不明	Extra: Melajoe	B	スラバヤ	10.21
不明	Sadja tarraf	B	スラバヤ	10.21

* : A = filem “WEDAD”, B = Gamboes Oekest dari Studio NIROM dpp. S.Albar

〈クロンチョン音楽〉(1942.1.4～31)

歌手名	曲名*	楽団名	放送局	放送日
D. Mas'oed	不明	Menara	全国	1.9
Kasdi	不明	A	中・東ジャワ	1.15
Koesbini	不明	不明	西ジャワ	1.15
Koesbini	不明	不明	中・東ジャワ	1.31
Louis Koch	不明	B	西ジャワ	1.20
Louis Koch	不明	B	全国	1.20
Miss Amelia	不明	不明	メダン	1.7
Miss Anna	不明	C	全国	1.16
Miss Annie Landow	不明	B	西ジャワ	1.20
Miss Annie Landow	不明	B	全国	1.20
Miss Brintik	不明	Menara	全国	1.9
Miss Eulis	不明	不明	中・東ジャワ	1.7
Miss Idjem	不明	D	中・東ジャワ	1.7
Miss Jacoba	不明	不明	西ジャワ	1.4
Miss Jacoba	不明	不明	メダン	1.13

〈クロンチヨン音楽〉(1942.1.4～31) 続き

歌手名	曲名	楽団名*	放送局	放送日
Miss Jacoba	不明	不明	メダン	1.26
Miss Moor	不明	不明	全国	1.4
Miss Moor	不明	不明	西ジャワ	1.7
Miss Moor	不明	不明	中・東ジャワ	1.26
Miss Netty	不明	不明	西ジャワ	1.14
Miss Netty	不明	B	西ジャワ	1.20
Miss Netty	不明	B	全国	1.20
Miss Netty	不明	不明	メダン	1.31
Miss Poni	不明	E	西ジャワ	1.25
Miss Poni	不明	E	全国	1.25
Miss Roekiah	不明	不明	中・東ジャワ	1.4
Miss Roekiah	不明	不明	西ジャワ	1.5
Miss Roekiah	不明	F	中・東ジャワ	1.12
Miss Roekiah	不明	不明	中・東ジャワ	1.29
Miss Roekiah	不明	B	西ジャワ	1.20
Miss Roekiah	不明	B	全国	1.20
Miss Roem	不明	不明	メダン	1.7
Miss Soekinah	不明	A	中・東ジャワ	1.15
Miss Soerip	不明	B	西ジャワ	1.20
Miss Soerip	不明	B	全国	1.20
Miss Solami	不明	不明	西ジャワ	1.28
Miss X	不明	G	西ジャワ	1.13
Nji Toeminah	不明	D	中・東ジャワ	1.7
Nji Toeminah	不明	H	中・東ジャワ	1.8
Nji Toeminah	不明	H	中・東ジャワ	1.15
Onang	不明	C	全国	1.16
S. Abdullah	不明	不明	メダン	1.7
S. Abdullah	不明	不明	中・東ジャワ	1.9
S. Abdullah	不明	不明	西ジャワ	1.10
S. Abdullah	不明	不明	メダン	1.19
S. Abdullah	不明	不明	中・東ジャワ	1.20
Soepardi	不明	B	西ジャワ	1.20
Soepardi	不明	B	全国	1.20
Sorhirman	不明	不明	メダン	1.13
T. J. Roeslam	不明	D	中・東ジャワ	1.7
Tan Tjeng Bok	不明	B	西ジャワ	1.20
Tan Tjeng Bok	不明	B	全国	1.20
Tjin	不明	G	西ジャワ	1.13
Walidjan	不明	E	西ジャワ	1.25
Walidjan	不明	E	全国	1.25
不明	不明	I	全国	1.6
不明	不明	F	西ジャワ	1.19
不明	不明	F	西ジャワ	1.24
不明	不明	F	西ジャワ	1.29
不明	不明	F	メダン	1.30
不明	不明	H	中・東ジャワ	1.25
不明	不明	J	メダン	1.10
不明	不明	B	西ジャワ	1.30
不明	不明	B	全国	1.30
不明	不明	H	中・東ジャワ	1.20

〈クロンチョン音楽〉(1942.1.4～31) 続き

歌手名	曲名	楽団名*	放送局	放送日
不明	不明	K	全国	1.23
不明	不明	L	メダン	1.24
不明	不明	M	中・東ジャワ	1.28

* : A = Kembang Katjang dpp.nji Soekorini, B = Radio-Orkest dpp.Ismail
 C = Sinar Tionghoa dpp.Tan Kim Hay, D = CIRVO Radio-Orkest dpp. Soepii
 E = Java Stem dpp. Karis F = Lief Java, G = The Golden Star dpp. Kwee Tjin Kie
 H = Radio-Orkest Soerabaja S dpp. Soekarno, I = Sentjaki dpp.T.Achmad
 J = Muziekvereniging “Jong Deli” dpp. Soelaiman, K = Sinar Timoer dpp. R.Moedjiono
 L = Soeara Timoer dpp. Jahja Koto, M = Lief Indie

〈ムラユ音楽〉(1942.1.4～31)

歌手名	曲名	楽団名*	放送局	放送日
Abd Karim	不明	A	西ジャワ	1.14
Abd Karim	不明	A	全国	1.14
Abdoellah	不明	B	全国	1.7
Achmad C. B	不明	不明	メダン	1.8
Achmad C. B	不明	不明	メダン	1.16
Ali Albar	不明	C	メダン	1.15
Che Aminah	不明	D	メダン	1.25
Entje Siti Rohamah	不明	E	全国	1.27
Hoessein	不明	F	全国	1.21
Masoed	不明	F	全国	1.21
Miss Delia	不明	不明	メダン	1.17
Mohd Alie	不明	A	西ジャワ	1.14
Mohd Alie	不明	A	全国	1.14
Ripin	不明	E	全国	1.27
T.Effendi	不明	B	全国	1.7
不明	不明	G	メダン	1.4
不明	不明	G	メダン	1.23
不明	不明	H	メダン	1.9
不明	不明	H	メダン	1.29
不明	不明	I	メダン	1.14
不明	不明	J	全国	1.17
不明	不明	K	全国	1.24
不明	不明	K	全国	1.25
不明	不明	E	西ジャワ	1.31

* : A = Sinar Medan dpp. Mohd. Noor, B = Patjaran Moeda dpp. O. H.Effendi
 C = 不明/Gamboes Melajoe modern, D = 不明/lagoe Melajoe Modern
 E = Seberang dpp. Husein, F = Java-Orkest dpp. Mohd. Alie, G = Persatoean Asli dpp. Abdoel Hamid
 H = 不明/Gamboes Melajoe, I = Partij Ronggeng Melajoe Medan dpp. Abd.Hamid
 J = Radio-Orkest dpp. Ismail, K = Soengai Moesi dpp. Tamin

〈ハルモニウム音楽〉(1942.1.4～31)

歌手名	曲名	楽団名*	放送局	放送日
Boeng Sjangle	不明	A	全国	1.4
Boeng Sjangle	不明	A	西ジャワ	1.12
Boeng Sjangle	不明	A	中・東ジャワ	1.12
Boeng Sjangle	不明	A	全国	1.18

〈ハルモニウム音楽〉(1942.1.4～31) 続き

歌手名	曲名	楽団名*	放送局	放送日
Boeng Sjangie	不明	A	西ジャワ	1.26
Boeng Sjangie	不明	A	中・東ジャワ	1.26
Boeng Sjangie	不明	A	全国	1.26
Entjik Aini	不明	A	全国	1.4
Entjik Aini	不明	A	西ジャワ	1.12
Entjik Aini	不明	A	中・東ジャワ	1.12
Entjik Aini	不明	A	全国	1.18
Entjik Aini	不明	A	西ジャワ	1.26
Entjik Aini	不明	A	中・東ジャワ	1.26
Entjik Aini	不明	A	全国	1.26
Noerisah	不明	A	西ジャワ	1.26
Noerisah	不明	A	中・東ジャワ	1.26
Noerisah	不明	A	全国	1.26
Ratna	不明	A	西ジャワ	1.26
Ratna	不明	A	中・東ジャワ	1.26
Ratna	不明	A	全国	1.26
不明	不明	B	中・東ジャワ	1.4
不明	不明	C	中・東ジャワ	1.15
不明	不明	D	西ジャワ	1.30

* : A = Penghiboer Hati dpp Engkoe St, P.Boestami, B = Setia Hati dpp, E. Moesa

C = Moors H.O.V Rumba dari Semarang dpp, S.Wardi & Achmad Akoean

D = 不明/Gamboes dan Harmonium

〈アラブ音楽〉(1942.1.4～31)

歌手名	曲名	楽団名*	放送局	放送日
Abd. Halik	不明	A	西ジャワ	1.22
Abd. Halik	不明	A	全国	1.22
Moh. Lian	不明	B	メダン	1.16
Mohd Albar	不明	不明	メダン	1.13
Mohd Albar	不明	不明	中・東ジャワ	1.16
Mohd Albar	不明	不明	メダン	1.28
Oum Kalsoum	不明	不明	中・東ジャワ	1.7
Oum Kalsoum	不明	不明	全国	1.8
Oum Kalsoum	不明	不明	中・東ジャワ	1.9
Oum Kalsoum	不明	不明	西ジャワ	1.16
Oum Kalsoum	不明	不明	中・東ジャワ	1.28
Oum Kalsoum	不明	不明	全国	1.28
Sech Albar	不明	不明	メダン	1.5
Sech Albar	不明	不明	西ジャワ	1.5
Sech Albar	不明	不明	中・東ジャワ	1.5
Sech Albar	不明	不明	全国	1.5
Sech Albar	不明	不明	中・東ジャワ	1.6
Sech Albar	不明	不明	メダン	1.13
Sech Albar	不明	不明	西ジャワ	1.16
Sech Albar	不明	不明	西ジャワ	1.19
Sech Albar	不明	不明	中・東ジャワ	1.20
Sech Albar	不明	不明	西ジャワ	1.26
Sech Albar	不明	不明	全国	1.27
Sech Albar	不明	不明	西ジャワ	1.28

田子内：植民地期インドネシアにおけるラジオ放送の開始と音楽文化

〈アラブ音楽〉(1942.1.4～31) 続き

歌手名	曲名	楽団名*	放送局	放送日
Sech Albar	不明	不明	メダン	1.29
不明	不明	C	中・東ジャワ	1.8
不明	不明	D	全国	1.8
不明	不明	E	メダン	1.9
不明	不明	F	西ジャワ	1.15
不明	不明	F	全国	1.15
不明	不明	G	西ジャワ	1.29
不明	不明	G	全国	1.29
不明	不明	H	メダン	1.30

*：A = Pemoeda Betawi dpp. M.Arsjad, B = Permai dpp. Abdoel Sjoekoer

C = S.Salim Djawas di Semarang, D = Al.Iktidam dpp.t.S.Abd.Adjid

E = Dafago (Damoel Fattah Gamboes Orkest) dpp. Moh.Said & Toenoes

F = 不明／dpp. Che Sitti Rohmah dari Garoet, G = Alwardah dpp. S.H Hamadah

H = Rhaudatoel Akmal Gamboes Partij dpp. Machmoed Ibrahim